
狩人物語

黒崎しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狩人物語

【Nコード】

N6478Y

【作者名】

黒崎しのぶ

【あらすじ】

イケメンで最強な主人公がHUNTERの世界にトリップ！
ネテロの弟子で、紅い閃光と呼ばれる少女ユキノ。
原作かき回しながら、悪い奴らをフルボッコにしちゃうお話。
オリキャラ多数！只今ゾルディック家訪問中。

設定とか

蒼迅ユキノ（あおはやゆきの）

女。 16歳。 162cm 43kg

激しく差別されていた一族の長の娘。

兄コウヤと6歳のときに捨てられる。

そこを謎の組織に拾われ、武術をすべて使いこなし、
勉強もすべて理解するようになる。

そのほかは、いずれ本編で明らかになります。

それよか、外伝作った方がいいですかね？

甘いもの大好き。かわいいものも好き。

幽霊、妖怪といったものが大の苦手。

感情をあまり表に出さない。

人を信じるのが苦手。（過去に何度も裏切られたため）

嫌いな人間にはとことん冷たく、好意を抱いている人間には、
とことん優しい。ブラコン。

人殺しはしない。

9：1の割合で男に間違えられる。

しかし、本人はそれにすら気付かないほど鈍い。

自分の見た目には疎い。

赤髪赤目。細身で手と足が長い。

主になぎなたなど、剣系の武器を使う。（基本は素手）

曲弦師、蜘蛛病と呼ばれる、

糸を使った戦闘もできる。（主に罾とか、諜報作業のとき）

胸あたりまでに延ばした髪は、後ろで低い位置にひとつにくくっている。

首には、蒼い滴型のペンダントをつけている。

通り名・あだ名

紅い閃光

紅い貴公子

レッド・デビル

e t c .

ユキ ゆきりん

ユキピー

おつまみ

e

t c .

念 特質系

全系統、100%引き出せる。

能力は、そのうち！すみません・・・たぶん知っている技なら繰り出せる

みたいな感じになると思います。

オリキャラ

ユカリ

男

18歳

ゾル家執事

イルミお世話係

左目赤色、右目銀色。

容姿端麗。人情が厚い。執事長。

強化系

この小説では、感想を受け付けています！
むしろ書いてください！ここはこうだとか、こうした方がいいとか
などなど

中傷、荒らし以外なら何でもオーケーです。

慌てて作ったので、誤字脱字があるかもです・・・。

Prologue

「ユキ．．．」

悲しそうな顔をしながら、俺を見つめる兄さん。

「何でお前が．．．こんなことに．．．!」

俺の手を握り、兄さんは泣き出してしまった。
兄さん．．．

「ごめんなさい．．俺にはこれくらいしかできないけど．．．」
はっとしたように顔を上げる。

「ユキノ．．!おい．．やめろ．．!」

俺の周りに風が起こる。
だんだんと俺の体が下から消えていく。

「ユキ!ユキ!．．．ユキノっ!」

顔の半分が消えた。

兄さんが必死で何か喋っているが、もう何も聞こえない。

兄さん．．．

「ありがとう．．．」

もう何も残らない。

拝啓。

「兄さん」

俺は生きてます。

元気にしてます。

だから心配しないでください。

俺は強くなりました。

ジンというハンターに拾ってもらって

色々な人に会い、色々教えてもらいました。

今日はハンター試験です。

俺は内部試験官というものをします。

兄さん。いつか会いに行きます。

次に会ったら、俺と戦ってください。

あの日のように、負けたりしません。

絶対に勝って見せます。

だから、会いに行きます。

たとえ、違う世界でも。

その日まで、待っていてください。

絶対に会いに行きますから - - - - -

試験開始。その一

「ここかよ」

ある定食屋を見上げながら俺は思わず呟く。

ネテロ師匠からもらった地図ではここで間違いない。
でもなあ・・・『ハンター試験会場』。

本当にいいのか。

いつまでも悩んでられないので、俺はドアを開ける。

「いらっしえーい」

気前のよさそうな親父の声が聞こえた。

「ご注文は？」

俺は思わずニヤける。

「ステーキ定食」

びっくり、と反応した。

そんな露骨に反応しちゃダメだろ。

「焼き方は？」

「弱火でじっくり」

そう告げると、かわいい女の子が部屋（？）まで案内してくれた。
ウィーンと音がし、ゆっくりと動き出すエレベーター。

少し、重力感覚が狂う。

「お、食っていいのかこれ」

用意してあったのはおいしそうなステーキ達。

俺はフォークを突き刺し、大胆に噛みつく。

無我夢中でほうばっていたらチン、と音がし、止まる。

「ついちゃったか……」

まだ途中だったステーキを何とか口に詰め込み、残ったステーキを名残惜しいと思いながらエレベーターを出す。

今年はいいい人材がそろつてると思うんだよなあ。

何でわかるかって？そりゃあ勘だ。

だってはいった時の空気が俺のときと大分違うし。

そういや俺のときつて、俺も含めて二人しか残らなかったんだっけ。確か、シャル・・・シャルナークといったかな。ま、なにせよ

「これからが楽しみだ」

試験開始。その二

「ユキノさん」

「うはいっ!？」

いきなり声をかけられ、俺は思わず情けない声を出す。
周囲の人間は振り返り何事かと俺らを見つめる。
なんだよこの羞恥プレイ。

「ユキノさん・・・大丈夫ですか？」

マーメンだった。いきなり声かけんなよ。

「ごめん。間抜けな声でた」

マーメンは苦笑いをしながら、番号札を渡してくれた。

「109番・・・結構遅かったな」

番号札を胸のあたりにつける。

まあ、しょうがない。その前に師匠に頼まれた(押しつけられた)仕事を

たくさんすませてきたのだから。軽く五力国は回った。

しかもあの狸爺・・・乗り物使ったら即爆破じゃぞ とか言いながら
念で爆破装置つけやがって・・・!あ、もちろん徐念した。
俺の能力で!

なんか、イラついてきた．．．．．。

「おい兄ちゃん、俺トンパっていうんだけどよ、お近づきのしるしに乾杯しねえか？」

「うさんくさ」

声出ちゃったけど、いいか。

でも、心なしかトンパがおろおろし始めた。

もしかして凶星だったり。

なんか不自然で怪しいな。

よし、鎌をかけてみるか。

「それってホントに何も入ってねえの？なんか変なおいすんだけど」

もちろん嘘。むしろ今、鼻詰まって何もおいしくないし。

「な、なんにもはいつてねえよっ、い、いいから飲んでみるよ」

あわてながら言うトンパ。ここまでくりゃあ、確実に入ってんな。俺はトンパに追い打ちをかける。

「下剤入りジュースならいらねーよ」

言い放つ俺に、トンパは、弾丸のごとく逃げて行った。

「．．まさかほんとに入っていたとは」

俺の疑い深い性格、はじめて感謝したかもな。

「はあ．．．眠い」

試験開始まで寝とこ。

俺は近くの壁に寄りかかると、すぐさま眠りに就いた。

一次試験。その一

ジリリリリリリリリリリリリリリリ！！！！

「……………！！？」

俺はいきなりなったベルに、驚き声にならない叫びをあげる。
びっくりした……………

「これより試験を開始します」

あ、サトツさん。相変わらずお髭がダンディ。
試験開始かあ。なんか緊張してきたな。

前はそうでもなかったけどな。
年ってとるもんじゃねえな

サトツさんがしゃべり終わり、集団が移動する。

やっと、試験開始か。

「おりおんざのーみぎかたにいかがやくー」

俺はのんきに歌を口ずさみながら、走っていた。

一見ゆったり走っているように見えるが、
一歩が大きい俺の走り方は、よく兄さんに「訳わかんなくなってるな」と
言われた。

「ねえ、お兄さん！」

後ろから声がする。ゆるーと振り返ってみると、満面に笑みを浮かべた少年がいた。

「俺のこと？」

一応、女なんだけど。

「うん！俺ゴン＝フリークス！お兄さん名前は？」

へえ、ゴン君か。いいね、純情な子、好きだなあ。

「俺は、ユキノだよ。気安くユキって呼んでくれ」

「うん！よろしくユキ！」

お互いに手を出し、握手をする。

...

「ゴン。もしかして、」

「ん、なんか言った？」

やっぱり違うよなあ。

「いや、なんでもねえよ」

怪訝そうに首をかしげたゴンだったが、何か思い出したように俺の手を引っ張り、後ろに駆けだした。

「え、ちょ、ちょお？！」

足がもつれて、誰かの胸にダイブしてしまった。

その誰かさんは、「うお」と言いながらも、受け止めてくれた。

「すみません．．．」

俺がその人から離れながら言う。

「大丈夫？ユキ」

「うん、大丈夫．．．」

ゴンは俺がぶつかった男．．．正しくは、青年とおじさんに向かって俺のことを紹介する。

「クラピカ！レオリオ！こっちはユキだよ！」

俺がちら、と二人を見ると、すごい勢いでそらされた。
なんでさ！

「おいゴン！そいつはトンパが危険だって言ってたじゃねえか！」

一瞬、耳を疑う。

「トンパ．．．？危険人物．．．？」

「ああ、言っていたぞ、ヒソカと同じような快樂殺人鬼だと！」

快樂殺人鬼だと．．．？俺が？

「俺は快樂殺人鬼じゃねえし！まず人殺しなんて普通怖くてできねーだろ！」

「え．．．？」

「だって、夜とか出てきそうじゃんか！取りつかれそうじゃんか！」

何が、とはあえて言わない。嫌いなんだよ、そういう奴！

「お前、それほんとか？」

レオリオが尋ねる。

「ああ、人を殺した事なんて一度も・・・」

ない。言いかけたところで言葉を飲む。

殺しただろ・・・自分を。

「ええい！とにかく、俺は殺さねーの！あいつと一緒にすんな」

ヒソカは嫌いだ。変態だから。

「そうだったのか・・・すまなかったな」

「いやいや、分かってもらえればそれでいいんだ」

友達が三人増えました。

一次試験。その二

誤解が解けてから、俺らはすっかり打ち解けた。
いや、ほんとによかった。てか、トンパ．．
今度脅し．．げふんげふん。挨拶しに行かなくちゃねっ！

「おいコラガキ！それは反則じゃねえのか！」

レオリオが叫んだ。

これは有名なあのシーンじゃないか！
これは参加するに限るねっ

「なんで？」

キルアがきいた。

レオリオのこめかみあたりにうつすらと青筋が浮かぶ。
やっべえ、超うけるんですけど！

「これは持久力を試すテストなんだぞ！」

「でも、道具使っちゃいけないとは言ってないよ」

ゴンがいった。

「一本取ったねゴン君」

俺がにやにやしながら言っと、ゴンもにへっと笑ってくれた。
やばい、超可愛い。

「ねえ、君名前なんて言うの？」

俺が思い切って尋ねてみた。

「俺はキルア。あんたは？」

答えてくれるとは．．．地味に感動だ。

「俺はユキノ。ユキでいいぜ、よろしくキルア」

そういうと、キルアはゴンに話しかける。

「お前いくつ？」

「俺は今年で十二！」

「（同い年、ねえ）」

お、このやり取りは。

「やっぱり俺も走ろつと」

キルア、カツコよかったな。

「おっさんの名前は？」

「おつさ．．．これでもテメえらと同じ十代だぞ俺は！」

「「「「うそおおお？！」「」「」」

俺も入りました。

やっぱりレオリオは老け顔でした。

だって、絶対兄さんより年上だよ！

俺は今年で16。兄さんとは、6歳違い。

よってレオリオは22より年上となるのだ（何キャラ）！

いつまでもいじられているレオリオの肩に手を置く。

「レオリオ」

俺が同情の眼差しを向けると、レオリオは

「ユキ、分かってくれるのか?！」

そんなレオリオとは裏腹の言葉を俺は口にする。

「年齢偽証は立派な詐欺だよ?」

それから30分間、レオリオは口をきいてくれませんでした。

一次試験。その三

もう何時間走ったんだろ。

ぶつちやけペース遅くて疲れてきた・・・。

楽な試験だけど精神的にはつらいよな。

「はぁ・・・。」

「なぁユキ大丈夫？」

「なんか疲れてるみたいなんだけど」

「気疲れとペースが遅くて逆に疲れた」

「あーそれわかる！」

「じゃあさ一番前まで行こうぜ」

そういつてゴンとキルアはスピードを上げた。

もちろん俺も置いて行かれないのでペースを上げましたよ。

一人ぼつちは嫌いだ。

そしていつの間にか一番前にまで来ていた。

「階段とかめんどくさ」

「だな。しっかしハンター試験って結構簡単かもな」

まあ今のところただ走ってるっただけだしな。

これだけで受かるなら楽なんだけど。

この後色々面倒くさいんだよなー

本当やんなっちゃう。

「ねえところでキルアはなんでハンターになりたいの？」

「は？俺？・・・別にハンターになりたくなんかないよ。ものすごく難関だって言われてるから面白そうだと思っただけさ。でも拍子抜けした。ぜーんぜんつまんねーし」

本当今思うとすごい子どもたちだよね。

ヒソカが気に入っちゃうのもわかる気がしてきた。

あつ俺とあの変態と一緒にすんなよ！

ヒソカは嫌いだ、変態だから。(二回目)

「ゴンは？」

「俺はね、親父がハンターやってるから。親父みたいなハンターになるのが目標だよ」

「キラアとは違ってまともな理由だね」

「ユキ・・・それじゃまるで俺がまともじゃないみたいじゃねーか」

「まともな人は暇つぶしだなんていいません」

「あはははは！」

ハンター試験を暇つぶしとか・・・

本当天才はちげーな

つか爆笑のゴンかわい・・・

「で？ユキは？」

「へ？俺？」

「そーだよ。ユキだけ言わねーとかずりーよ」

ちよつとふてくされるキルア

おいおいお姉さん暴走しそうだぜ

かわいすぎだろこの子ども組

キャラ崩壊して胸キュンキュンしそうだ

「俺はライセンスあつたほうが色々と生活に便利だから・・・かな？」

「かな？つて・・・自分のことだろう？なんで疑問形なんだよ」

「いやぶつちやけ俺もあんまりちゃんとした理由ないかも」

「じゃあ人のこと言えないじゃねーか！」

「いやキルアよりはまともだとおもうよ」

「んだとー！！」

本当試験中なのにすごく和むこの空間。

メインキャラに絡む気なかつただけだな。

なんかほうつておけないし、何よりこの絡みが心地よい。

久々に孤独感を味合わずにいられるな。

そしてなんやかんややっているうちに出口から光が差し込んだ

一次試験。その四

「うおう、眩しい」

暗かった地下から一変して、湿原へ。
外に出ると、太陽がさんと照らしていた。

「やっと地下から出られたぜ」

皆お疲れのようだ。

そりゃあ、無理もねえな。原作知ってた俺でも結構つらかったんだから。

さつきから、ヒソカのねつとりとした視線がづらい。
前に、仕事で知りあって目付けられたんだよなあ。

「嘘だ！そいつは嘘をついている！」

突如響いた声。

それは怪我だらけの男からだった。

なんか長ったらしく理屈こねてるけど、
矛盾しまくりだ。

それよかてめえ、俺のサトツさんにけち付けやがったな。
でも、偽物の言葉を信じてる奴もいた。

あ、レオリオ。

なんか笑えてきた。

俺は一生懸命こらえるが、とうとう吹き出してしまった。

「だはははははっ！な、なに言ってやがんだよ！ひやはははは！超受けるんですけど！矛盾しまくりだっつーの！！」

だははと爆笑する俺を、冷たく見つめるキルア。

偽試験官は、顔を赤くして、且あわてていう。

「ど、どこが矛盾しているというんだ！」

ようやく笑いがおさまってきた俺は、手を口に当て、説明を始める。

「よく考えてみるよ、人面猿ってのは、貧弱なんだろ？それなのにサトツさんは息も切れてないし汗もかいてない。猿には不可能ってわけだ」

周りから、そっぴやそうかも、といった声が聞こえてきた。偽試験官の顔はだんだん青くなってくる。

「それに、」

俺はにこつと笑い、止めをさす。

「何で生きてる猿を連れてるのかなあ？」

言い終わると同時に猿と偽試験官にトランプが刺さった。

「ありやりや・・・」

ヒソカのトランプの餌食になった一人と一匹を一瞥し、
俺は動き出した集団について行った。

一次試験。その五

湿原に入り、俺はゴン達と別れ、一人で行動していた。

『だあああつ！お前達うぜえ！』

マチボツケとかジライタケとかサイミンチョウに行く手を阻まれること数十分。そろそろ我慢の限界らしい俺は手を高く振り上げた。

「つてえー！ー！！！」

『おっさんの叫び声？…チツ、アイツか』

おっさんの叫び声が遠くで聞こえ振り上げた手を下ろし直ぐ様元来た道を走り出す。

『（何であいつは大人しくしてらんないんだ。面倒事増やすな死ね）
』

色々な苛立ちが混ざって今にも爆発しそうな気持ちを必死に押さえ込み血の臭いが濃いところへ向かう。まあ、原作知ってるが、仕事だから、一応行こう。

「うん！君も合格。いいハンターになりなよ。一人で戻れるかい？」

コクリと頷いたゴンから離れたヒソカは何故か気を失ってるおっさんを肩に担いで姿を消した。俺は膝から崩れ落ちたゴンを遠くから一瞥しヒソカの後を追った。

「…キミはいつまで尾けて来る気だい？」

『やっぱりバレてた？』

こちらを見ずに言われおっさんを肩に担ぎながら走るヒソカの横間で走る。ちらりとヒソカを盗み見ると機嫌がいいのかにこにこしている。

『俺の仕事増やすようなことするなよ』

「だってあまりにタルいんだもん。選考作業を手伝ってやろうと思っ
つてね」

『受験者の中でお前と同等または上の奴なんて俺とあいつだけだろ
こいつの可否基準が全く理解出来ない。ゴンが合格なのはわかるが
気絶してるおっさんを何故合格にしたのか少しだけ気になる。』

『…っと、やっと着いた。んじゃ彼は預かってくよ』

二次試験会場らしき場所に着き俺達は足を止めた。ヒソカからおっ

さんを受け取り近くの太い木まで引き摺る。

「相変わらずだなあ、ユキは。くくっ、そこが可愛いんだけどね」

舌なめずりをしてそんなことを言っていたなんてもちろん俺は知らない。

一次試験。その一

俺はレオリオが入る木の下で二次試験が始まるまで待っていた。

「ふう．．．」

暇すぎる。することない。

さっきまでレオリオで遊んでいたのだが、いい加減あきてケータイをいじっていた。

ジンからの着信服歴が275件。
仕事の依頼が7件入っていた。

つーか、ジンどんだけかけたんだ。

俺が悩んでいると、手に持っていたケータイが震える。
誰かと思いいてみれば、案の定ジンだった。

「もしもし」

『っユキか？何度かけたんだぞ』

「試験中だったんだよ、てかかけすぎだっつーの」

『しょうがないだろ、心配だったんだから』

「ふーん。じゃっ！」

『あつてめっ、切るな』

ジンが何か言っていたが、無視して切った。

どうせ危ない奴は即ぼこれとかしかいわねーもん。

するといいタイミングでゴン達が駆けてきた。

「ユキっよかった、ちゃんと合格してたんだね！」

ゴン、君はさっきまで変態と直面してたって言うのに・・・
俺の心配までしてくれるなんて、なんていい子なんだ！

「ああ、大丈夫だよ。というかレオリオはどうしてこんなことに・・・
」

知ってるけど（笑）

「そうなんだよ、俺も覚えてねえんだよな」

「うおう！？」

絶対に寝ていると思っていた俺は、下から聞こえた声に
素っ頓狂な声を上げる。

「ユキ・・・」

「クラピカ、そんな目で見ないで」

憐みの目で見てくる、クラピカ。

そんな目で見られたって、いたたまれないから。

「というより、何で中に入っていないのだ？」

「ああ、それは」

入れないんだよ、そう言おうとした俺をさえぎり、
銀髪美少年もといキルアが言う。

「入れねえんだよ」
「キルア！」

ゴンはキルアを見つけ、うれしそうだ。

二人で話し始めた二人を見ていたら、レオリオに話しかけられた。

「なんだ、羨ましいのか？」

にやにやしながら言ったレオリオ。

「いんや、若いつていいなと思って」

「ユキ。お前は幾つだ？」

「十六だけど」

言った瞬間、四人が固まる。あ、タイムストップとかは使ってない。

「え．．何さ？」

「いや、13ぐらいだと思ってたから」

「ははは、俺3つも若返ってたか」

身長大分伸びたと思ったんだけどな．．
地味に悲しい。

そんなこんなしているうちに、12時になり、
ドアが開いた。

さあ、二次試験スタートだ。

二次試験。その一

重々しい扉が開くと脚を組んで椅子に座っている美人試験官のメンチとその後ろで腹を空かせたためちやくちやデカい大男のブハラがいた。

『（あの獣が唸ってるような音ってあの人のお腹の鳴る音だったのか…）』

じーっとブハラさんを見てるとまた背後から微かに殺気を感じた。ちらりと見ればヒソカが2人に殺気を放っていた。何をしているんだあの馬鹿は。

「どお？おなかは大分すいてきた？」

「聞いているとおりもーぺーぺーだよ」

「そんなわけで二次試験は料理よ！！美食ハンターのあたし達2人を満足させる食事を用意してちょうだい」

まずはブラさんが指定する料理を作りそれに合格した人だけがメシの指定した料理を作るというのが二次試験の内容。そんなブラさんのメニューは「豚の丸焼き」だそうだ。

「森林公園に生息する豚なら種類は自由！それじゃ二次試験スタート……」

スタート開始の合図がされたと同時に受験者は一斉に森の中へと駆け出した。俺も森に向かおうと後ろを振り向けば少し離れたところでヒソカがにんまりと笑って手招きしてるのが目に入ってしまった。

『（見なきゃよかった。何であいつ俺の目に入る場所に立ってんだよ）』

大きな溜め息をついてゴンとクラピカ、レオリオの元から静かに離れた。

「オレ達も早く行こうぜ……ってユキは？」

「あ、本当だ。でもキルアもないし大丈夫じゃない？」

「レオリオは人の心配より自分の心配をした方がいいのではないかな？」

「てめっ、どいう意味だよ！？」

「まあまあ……」

そんなこんなで、ゴン達も豚を捕獲するために会場を出た。

二次試験。その二

「……何で俺がお前の為に力使わないといけないんだよ」

「そのかわりボクがユキの分の豚も取ってきてあげたじゃないか」

「ぶつ叩いて豚2頭取ってくんのと豚2頭焼くのどっちが大変だと思ってるんだよ」

ぶつぶつ文句を言いつつヒソカが取ってきた2頭の豚をこんがりと焼き上げる。

普段焼き尽くしてばかりだから焦がさないように調節するのは少し難しいことがわかった。

「ほい、出来上がり。さっさと持つて行くぞ」

「ユキがいてくれて助かったよ」

「キモいこと言うな死ね」

にやにやしながら豚を受け取ったヒソカに舌打ちをしてブラさんの元に向かった。

「うんおいしい！これもうまい！うんうんイケる！これも美味！」

「（豚の丸焼き70頭も食べられるなんて…あの人本当に人間か？）」

「あゝ食った食った。もーおなかいっぱい！」

「豚の丸焼き料理審査！！71名が通過！！」

「ブハラさんの食いつぷりに誰もが啞然としているとメンチはドラを鳴らし試験終了の合図をした。」

「あたしはブハラとちがつてカラ党よ！！審査もキビシクいくわよ！。二次試験後半、あたしのメニューはスシよ！！」

「（スシか…最近全く食べてないな）」

二次試験。その三

「…何ジロジロ見てんだよ」

「スシがどんなものか知ってそんな顔してるから」

「修行時代に師匠と食べに行ったことあるんだよ。言っとくけどお前に教えるつもりはない」

「頑張れよー、と手を振り一人静かに外に出る。スシよりも先に仕事をやらなければいけない。」

「サトツさーん、ちょっといい？」

「どうかしましたか？そういうえば、ユキさんは、ライセンスは持っていたのでは？」

「え、あれ？まさか会長に聞いてない……みたいだな。ったくあのクソジジイは…」

どうせ面白そうだとか面倒だとかで何も伝えてないんだろう。とな

ると他の試験官にも俺のことは伝わってないと考えた方がよさそう
だ。

「実は俺依頼でここにいるんだ」

「依頼、ですか…一体どんな？」

とりあえずサトツさんに依頼内容を大まかに伝え
紙切れを渡し後のことは任せてスシ作りの為魚を調達しに行こうと
一歩前に足を踏み出したその刹那、

「魚ア！？ここは森人中だぜ！？」

「声がでかい！！川とか池とかあるだろうが！！」

いやいやお前も十分声でかいから、と心中で突っ込みを入れながら
改めて魚の調達に向かった。

「…なーんか嫌な予感しかないんだけど」

二次試験。その四

「あら、あんたが一番なんて意外だわ」

「……もしかしてメンチ俺のこと忘れた？」

「は？あたしあんたに会ったことないわよ？」

「いやいやいや、あるから。普通に会ったことあるから」

と言うのが会ったことあるのは俺であって俺じゃないから知らなくて当然なんだけど（変装してるから）。

取り敢えずそれは置いといて俺は作ったスシをメンチに渡した。

「……タネは筋目に対して直角に切れてるし、シャリの握り具合もいい。素人にしちゃあ中々出来てるじゃない。109番合格よ。あんたはここに座ってなさい」

「ういーっす」

「！今の…まさか」

にこりと笑って少し声のトーンを高くするとメンチは気付いたのか目を見開いた。

「あんた…まさかユキ…？」

「おー、久しぶりだな。今ので気付いてくれなかったら多分俺泣いてたぞ」

冗談だけど、と言おうと口を開いたがメンチにいきなり抱き着かれた。

「うお！？ちょ、メンチさーん？苦しいから出来たら離れてほしいなーなんて…」

危つく舌を噛むところだった。なんて思いながら首に巻かれた腕が締めまり息苦しくなりメンチの背中を軽く叩く。

二次試験。その五

「全然連絡くれないから心配してたのよ！」

『ゴメンゴメン。仕事が忙しくてさ』

「だからって何ヶ月も音信不通にならないでよ」

そんなこんなで暫くメンチの話を聞いていると自信あり気な顔をしたレオリオがスシを持って来た。

「出来たぜー！！オレが完成第一号だ！！」

「残念だけど第一号は彼よ。……って食べるかあっ！」

「（おおぅ、さすがにきついよこれは）」

それからスシと言えるようなものは出て来ずメンチの苛立ちは募っていくばかり。

そして先程から人の作ったやつに対して笑ってたハゲが持ってきた。

「ダメね、おいしくないわ!」

「な、なんだとー!? メシを一口サイズの長方形に握ってその上にワサビと魚の切り身をのせるだけのお手軽料理だろーが! こんなもん誰が作ったって味に大差ねーべ!?」

「(コイツバカだ。完璧バカだ) なあブハラさん…」

「これはマズいね…」

すぐ隣でハゲを怒鳴りつけるメンチを見て俺達は大きな溜め息を吐く。

ハゲの所為でスシの作り方が受験者達にバレて次々とスシを持って来るが完全に頭に血が上った

メンチの審査はとても厳しく合格者は出ないまま、

「ワリ!!! おなかいっぱいになっちった」

第二次試験

合格者 1名

二次試験。その六

「テスト生の中に料理法をたまたま知ってる奴がいてさー、そのバカハゲが他の連中に作り方をバラしちゃったのよ」

合格者は1人だと審査委員会に電話しているメンチは相変わらずイライラしていて口調が荒々しい。

「とにかくあたしの結論は変わらないわ！二次試験後半の料理審査合格者は272番一人よ！！」

「まさか本当にこれで試験が終わりかよ」

「冗談じゃねーぜ……！！」

「（その気持ちはわかるけど俺に殺気を向けなくてくれ）」

ドゴオオン！！

突如鳴り響いた音の方に顔を向ければ青筋を浮かべ殺気立っている

デブがテーブルを叩き割っていた。

「納得いかなエな。とてもハイそうですか、と帰る気にはならねエな。つーかテメエその女に甘い言葉囁いて合格させてもらったんじやねエのか！！？」

「……………は？」

「オレが目指しているのはコックでもグルメでもねエ！！ハンターだ！！しかも賞金首ハンター志望だぜ！！美食ハンターごときに可否を決められたくねーな！！」

俺を指差して甘い言葉だのと言ったデブは直ぐにメンチに向き直りともんでもないことを言い放った。

意味のわからないことを言われるし知り合いを悪く言われるしでとうとう堪忍袋の緒が切れた。

「…黙って聞いてりやグチグチうるせエんだよ。美食ハンターごときだア？ざけんじゃねエよ。ハンターでもねエデブがシングルの称号を持つメンチを侮辱するな。それに自分が合格出来なかったからって俺に当たってんじゃねエよ。ハンターになるなら凡ゆる知識身に付けとけクソデブ。しかも何キッチン破壊してんだよ。食べ物無駄にすんな。」

「テ、テメエ…ぶつ殺してやらア!!」

先程の言葉が気に入らなかつたらしいデブは俺目掛けて殴り掛かって来た。

「強気な奴は嫌いじゃない。だけど、」

ドカツ!!!!!!

「お前みたいな奴は嫌いだ」

拳を躲して人差し指で額を弾けばデブは勢い良く飛んでいき壁を突き破って外までふっ飛んでいった。

「（速い…オレでも全く見えなかつた!）」

「はは、あんな大口叩いてたクセにザマアねエなア? 次俺の知り合い侮辱したら殺す」

聞こえてるわけないんだけど。
デブ同様殴り掛かろうとしていた奴等に伝えておく。

苛立ちを抑えるようにテーブルに置いてあるお茶を飲む
それでもいらつきがおさまれなかった俺はコップを片手で握りつづ
す。

受験者の顔が青くなる。

メンチにギロリと睨まれた。

「余計なマネしないでよ」

「だって試験官が受験者に手エ出したらマズくないか？殺る気満々
じゃん」

「ふん、まーね。賞金首ハンター？笑わせるわ！たかがデコピン一
発でのされちゃって」

メンチは立ち上がり後ろ手に隠していたかなり長い包丁をクルクル
と数回まわしてから
宙に投げそれを片手で取る。

「ハンターたる者誰だって武術の心得があって当然！！武芸なんて
ハンターやってたらいやでも身につくのよ！あたしが知りたいのは
未知のものに挑戦する気概なのよ！！」

「それにしても合格者1名とはちとキビシすぎやせんか？」

突然上空から声が聞こえ受験者達は慌てて外に出る。

そして上を見上げるとハンター協会のマークがある飛行船が飛んでいた。

「（会長直々にメンチを説得に来るとは…一体何考えてんだ？）」

遙か上空から躊躇いもなく飛び降りて来たかなり年をとったじいさんの足は何ともないらしい。

「（何者だこのジイサン）」

「（てゆーか骨は！？今ので足の骨は！？）」

ざわめく受験者達にメンチが

「審査委員会のネテロ会長ハンター試験の最高責任者よ」と告げた

瞬間、受験者達は緊張で固まる。

「ま、責任者といつてもしよせん裏方。

こんな時のトラブル処理係みたいなもんじゃ（チチでけーな）」

「（今変なこと考えただろこのエロジジイ）」

俺は分かったが、緊張しているメンチは会長が何を思ったのかは分からなかったようだ。

試験の合否について問われたメンチは審査員を降りると言ったが、実演参加するという形で再試験が行われることに纏まった。

二次試験。その七

そして飛行船に乗って着いた場所はマフタツ山。下を覗けば流れが早い川が流れている。

「安心して下は深い河よ。流れが早いから落ちたら数十km先の海までノンストップだけど。それじゃお先に」

「マフタツ山に生息するクモワシ。その卵を取りに行つたのじゃよ。クモワシは陸の獣から卵を守るため谷の間に丈夫な糸を張り卵をつるしておく。その糸にうまくつかまり一つだけ卵をとり岩壁をよじ登って戻ってくる」

受験者達は俺と同じように谷底を覗いた。

予想以上の激流に立ち竦む者も少なくない。クモワシの卵を取つたメンチは

攀じ登って上がって来た。

「この卵でゆで卵を作るのよ」

「（……簡単に言ってくれろぜ。こんなもんマトモな神経で飛びお
りれるかよ！！）」

「あーよかった」

「こーゆーのを待ってたんだよね！！」

「走るのやら民族料理よりよっぽど早くてわかりやすいぜ」

谷底を覗いて顔を青くさせるデブの隣でゴン達は躊躇いなく谷底に
飛び降りていった。

それに続いて他の受験者達も飛び降りていく。
けれど後ろを振り返ってみればまだ何十人も受験者達は残っている。
恐らく、というか確実にここでキブアップだろう。

「残りは？ギブアップ？」

「やめるのも勇気じゃ。テストは今年だけじゃないからの」

「（あの日から、俺の志願は美食ハンターだ！、とかいつちゃって
ー）」

俺はそんなことを、ゴンに卵をもらい、メンチに言いくるめられた
デブを見ながら

思
っ
て
い
た。
。

飛行船内。その一

「残った43名の諸君にあらためてあいさつしところかの。
わしが今回のハンター試験審査委員会代表最高責任者のネテロである。」

本来ならば最終試験で登場する予定であつたがいったんこうして現場に来てみると

なんともいえぬ緊張感が伝わってきていいもんじゃ。

せつかくだからこのまま同行させてもらうことにする」

「次の目的地へは明日の朝8時到着予定です。」

こちらから連絡するまで各自自由に時間をお使い下さい」

会長とマーメンが部屋から出て行くと緊張の糸が解けた受験者達は目的地に到着するまで各々自由に時間を潰し始めた。

クラピカとレオリオは疲れたらしく周りに気を配りながらも各仮眠を取っている。

そんな中ゴンとキルアは飛行船の中を探検しに行った。（誘われたけど丁重にお断りした）

ネテロ師匠のボールを取るのは俺も二年かかった。もうこりこりだ。

「ねエ、今年は何人くらい残るかな？」

「合格者ってこと？」

「そ、なかなかのツブぞろいだと思うのよね。一度ユキ以外落としたってこう言うのもなんだけどさ。サトツさんどお？」

「ふむ、そうですね…新人がいいですね。今年は」

あ、やっぱりー！？とテンションが上がっているメンチを横目にテーブルに並べられた料理を口に入れる。流石ハンター協会だ料理が美味い。

「ユキノはどう？」

「俺は405番と99番がいいと思う。後はあのハゲもいいんじゃないか？ブハラさんは？」

「そうだねー、新人じゃないけど気になったのがやっぱり44番…かな。」

メンチも気づいてたと思うけど255番の人がキレ出した時一番殺気放ってたの実はあの44番なんだよね」

デブがキレて俺がデコピンしたときは今にもこっちに向かって来そうなほど殺気立っていたのはヒソカだった。

「抑え切れないって感じのすごい殺気だったわ。

でもブハラ知ってる？あいつ最初からああたったわよ、

あたしらが姿見せた時からずーっと。あたしがピリピリしてたのも実はそのせい。

あいつずーっとあたしにケンカ売ってたんだもん」

「それサトツさんの時もそうだったよな。

ここにいる全員強いから問題ないだろうけどあいつは快樂殺人中毒者だから気をつけた方がいい」

「ええ、そうですね。彼は我々がブレーキをかけるところでためらいなくアクセルを

踏み込むような異端児のようですからね」

「（異端児か…）」

その言葉を頭の中で繰り返しながら最後の一口を口の中へ放り込む

「ご馳走様でした。一応受験者だし試験内容聞くわけにもいかないからそろそろ戻るよ」

メンチが何やら言っているが気にせず部屋を出る。

男ばかりのむさ苦しい部屋にいたくないので夜景が見える窓の側にあった長椅子に座った。

「いい加減出て来い」

「よく気付いたねユキ」

「当たり前。てかイルミ・・・ああ、ギタラクルだっけか」

顔面に無数の鉋を刺しているギタラクルは音もなく俺の隣に座った。

「キルアって銀髪の奴お前の弟だったよな？なあにー？もしかして弟君が心配になって来ちゃった？」

にやにやしながらかうように言えばギタラクルはびっくりと反応

した。

もちろん俺にしか分らないくらいのものだが。

．．原作知識ありって便利だなあ

「そんなわけないだろ。次の仕事上必要なだけ。ユキは？」

「なーんだつまんないの。俺はちよつと…仕事？」

「…訊いてるの俺なんだけど」

「細かいこと気にする男はモテないぞ。…あ、そーいえば久しぶりだな！元気だった？」

「（今更．．？）」

「イルミ？」

「……見ればわかるでしょ」

「顔面に鋳ぶつ刺してる無表情野郎のどこをどう見ればわかんたよ…」

長い付き合いだし元気だということはわかるけど。

「（イルミといると落ち着く。やっぱり好きだな）」

今頃キルアとゴンは師匠とボール遊びしてんだろっな。

「. . .」

キルアの暗殺術見てみたい気がする。

飛行船内。その二

「あれ、ユキどこいくの」

「ちょっと探検してくる」

やっぱりいてもたってもいられなくなった俺は、イルミと別れてゴン達のところに行くことにした。

「迷子にならないでね」

「イルミは俺をいくつだと思いで?」

あれから十分後。

「嘘嘘嘘うそ．．．!」

見事に迷子になりました。

引き返そうとしても、どっちから来たか分からず。

．．．ん?念を使えばいいだつて?

その時の俺はパニックで、そんな発想もできなかったよ。

「はぁ〜どうしょ．．．」

「何がだい？」

鳥肌が立つような、薄気味悪い声（全国のヒソカファンの方すみません）

が、背後からする。

．．．思わず悲鳴を上げた俺は悪くないと思う。

「俺の背後に立つな」

「じゃあ、前ならいいのかい？」

「訂正だ。俺に近寄るな」

「それは無理だね」

そついうと変態は俺に一步一步近づいてくる。

俺はヒソカとの距離を縮めないように、一步一步下がっていたが。

そんなやり取りが、結局全力疾走となり、俺とヒソカが到着の知らせがあるまで、リアル鬼ごっこしていたのは言わずと知れたことだろう。

飛行船内。 その二（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。
レビュー、感想などどんどん書いてください。

中傷、荒らし以外なら、何でも受け付けています。

三次試験。その一

翌日、予定時間の8時を少し過ぎた頃無事三次試験会場であるトリックタワーと呼ばれる塔の頂上に到着した。

「ここが三次試験のスタート地点になります。

さて試験内容ですが試験官の伝言です。〔制限時間72時間以内に生きて下まで降りてくること〕

だそうです。それではスタート！！頑張つて下さいね」

スタートの合図をするとマーメンは飛行船に乗り込み飛んで行った。

どうやら外壁を伝い降りて行くのは無理らしい。

怪鳥に喰われている86番から視線を戻すと40人くらいいた受験者がいつの間にか

半分近くいなくなっていた。

「そこで雇見付けたんだけどユキも一緒に行かない？」

「（かなり人数減ったな…ここにいれば死ぬことはないだろうし俺

も行くか) うん、そうするわ」

ゴン達に元に向かおうと振り返り歩き出した…はずだった。

「うおっ!!!?」

「「「「ユキ!!!」」」」

右足を踏み出し左足も前へ出そうとしたがガクリと身体が傾いた。
下を見れば足元に隠し扉があったらしく反応する間もなく穴の中へ
と落下して行った。

「あんなマヌケな声出すとか恥だ…!!
というよりこんなことに対応出来なかったことの方が恥だ…っ!!」

「おいおいこの落下速度と高さは絶対死ぬだろ。
これ念使うか身体能力ずば抜けてないとやばいって! 誰だよこんな
もの考えた試験官は!」

文句を言いつつ足にオーラを集め怪我ひとつすることなく着地する。

「（足地味に痛い…能力者じゃなかったら死んでたな。あ、一人死んでるし。うっわ色々飛び散っててグロ）」

血の臭いがした方に顔を向けると着地に失敗したであろう人間が死んでいた。

死体は見慣れてるけど目玉が飛びだし顔面ぐっちゃぐちゃでぶつちやけ気持ち悪い。

コツンと身体を足で蹴って台の上に置いてある手錠を手に取った。

「これをどうしろってんだ？」

その道は試練の道。君達にはいくつかの試練を受けてもらう。そこに置いてある手錠をつけ時間内に全ての試練をクリア出来れば合格だ。ただし手錠が外れたり切れたりしたら失格だ。それでは健闘を祈る！！

「だそうだけど？」

三次試験官から説明を聞き終わり陰に隠れ気配を消していた

奴の方に声を掛けるとそいつは静かに姿を現した。

「！…まさかお前と協力することになるとは思わなかったぜ」

「（ああ、あんときのバカハゲか）」

「俺はユキノだ。足引っ張るなよ」

「オレはハンゾーだ！ここだけの話だけどよ、オレ忍者なんだよ。
幻の巻物 隠者の書 を探……………お、おい話はまだ…！」

「もう試験は始まつてるんだ。お前の話に付き合ってる暇はない。
どうしても話聞いてほしいなら歩きながらにしろハゲゾー」

俺の右手とハゲゾーの左手に手錠を掛け顔を上げるとハゲゾーは落ち込んでいた。

あれかメンチに鬼のような形相で捲し立てられたときハゲハゲ言われて

トラウマにでもなったのか。…まあそんなこと俺の知ったことじゃないが。

扉が開き手錠に72時間で止まっていた時間が0に向かってカウントを始めた。

「よっし、さっさと行……うおわあっっ！……!?!?」

落ち込んでいたハゲゾーは扉が開いたと同時に何かを振り払うかのように走り出した……のは良かった。

「ちょ、テメ……何ヘマしてんだハゲ!!初っ端から足引っ張ってんな!……!」

「わ……悪い!けど実際は足じゃなくて手首引っ張ってんだけどな!」

「んなことどうでもいいんだよ!ふざけてんのか!」

扉の先に床がなくハゲゾーは落ちた。別にハゲゾーが落ちようと構わない。構わないが今俺達は手錠で繋がれてるわけで必然的に俺もその穴に落ちることになった。

三次試験。その二

咄嗟に左腕を伸ばし突起物を掴んで落ちることはなかったが
流石の俺も片腕だけで野郎一人を支えるのは正直辛い。

「おいハゲ！お前どうにかしろ！忍者なんだからどうにかしろ！」

「忍者…！よっしゃ、任せろ！」

忍者と呼ばれたことが嬉しかったのかハゲゾーは壁を蹴り俺を抱え
高く跳び上がり
取り敢えず向こう側に無事に渡れた。

「わざと落ちてみたんだが…」

「おーそうかそうかお前はそんなに俺に殺されたいのか。ん？」

「じょつ、冗談に決まってるだろ！さっさと次進もうぜ！」

につこりと笑っているがユキノの目は笑っていない。

「コイツあの44番と同じくらい…いや、それ以上にヤバイ。」

「コロコロ…」

「…ーい」

二次試験で255番をデコピンで吹っ飛ばしたときも今もオレですら身体が震える殺気…。
タダモンじゃねーな。

「コロコロコロ…」

「おーい、聞いてるかー？」

「っ！な、なんだ？」

「な、なんだ？じゃない。後ろ見ろ、うしろ」

「コロコロコロコロ…！！」

「後ろ…。っ！これヤバくねーか？」

「ヤバいな。このスピードだとあと数秒で俺達あのトゲ付き大玉に串刺しだな」

狭い下り坂を物凄い速さで走っているが回転の掛かっている刺付き大玉はどんどん加速していく。
普段なら硬で粉々にするか纏か堅でガードするんだけどハゲゾーがいるからそれは出来ない。

「コロコロコロコロ…」

「（そろそろ本気でやばいな）よし、決めた。悪いなハゲゾー」

「あ？っーかオレはハゲ……っ！？」

「少し寝ててもらっ…って寝かせてから言つもんじゃないか」

右手が拘束されてるからとてもやりにくかったが
何とか左手でハゲゾーの首に手刀を落とし直ぐ様肩に担いで後ろを
向く。

そして思いの外近くまで来ていた大玉に向かって息を吹き掛けた。
すると異常なほど冷たい冷気が辺りを包み込み一瞬にして凍り付い
た。

凍っている大玉に軽く触れれば澄んだ音が響き粉々に砕け散った。
キラキラと光るそれから視線を外し足元に移す。

「我ながら上出来だ」

しかし右も左も上も下も凍り付きマイナスの世界になった
ここにこれ以上長居すれば気絶したハゲゾーは永久に目を覚まさな
くなるだろう。

それでも俺は別に構わないが、今回はそうもいかない。

俺は仕方なく肩に担ぎ直し少し先にある扉まで歩みを進めた。

ハゲゾーを抱えているというハンデがあるにも関わらず

俺は順調に試練をクリアしていった。何度か捨てて行こうと思った

けど。

「おー、やっと最後の扉！」

ここに辿り着くまで色々なことがあり右肩が痛いし物凄く疲れた。ただ気を失っている奴が合格するのは気に入らないが手刀を落としたのは

俺だし諦めて勢い良く目の前の扉を開けた。

「最後の扉へようこそ。今からここにいる全員と戦ってもらう」

「戦い方は自由。その手錠を外しさえしなければ何をしても失格にはならない」

代表らしい囚人二人が一步前に出て説明をする。

手錠を外さなければ何をしてもいいだなんてこんな簡単でいいのだろうか。

「つまりお前達を殺しても構わないってことだな？」

俺は少し挑発するように言う。

「オレ達を殺す？綺麗な顔して面白えこと言うじゃねーか」

「ここにいる奴全員は終身刑の凶悪犯罪者だぜえ？」

「兄ちゃんこそ死にたくなかったら今の内にギブすることだな！」

ざつと見て150人くらい集まってる囚人達は俺の発言にゲラゲラ笑い出し一気に騒ぎ出す。

「（地味にム力つくなあ、オイ）」

俺は大きな溜め息をついてハゲゾーを肩に背負いなおす。

「それじゃ始めようか」

腰を低く落とし、構える。

…俺は口端を妖しく吊り上げ試合開始を促した。

三次試験。その三

俺の足元には、さっきまでの囚人たちが倒れていた。開始と同時に手刀を首元に落とし、気絶させた。

それは、一瞬の出来事。

俺が誰にも劣らないと言えるもの。それは『スピード』。

嵐、台風、むしろ竜巻が通りすぎたあのようなだった。

君は、あの『紅い閃光』かい？

スピーカーから声がした。

何て名前だったかな。ポッキー？

「まあ、そう呼ばれてた時もあったかな。あ、ポッキーさん。俺もう合格？」

リップだ。109番、294番合格！所有時間9時間37分！

その声とともに、重苦しい扉が開き、俺はそこに足を踏み入れた。

三次試験。その四

「おや、早かったじゃないかユキ」

ズザザザッ！

突然真横からした声に反射的に距離をとる

「そんなに過剰反応しなくてもいいじゃないかツレナイねえ」

「やかましい変態」

忘れてた…、三次試験通過第一号ヒソカだった…

指でコメカミを押さえながら俺はニヤニヤしている。ピエロを睨む

「くく…、いいねその目付きとってもそそられるよ」

ゾクウツ！

凄まじい悪寒を感じた俺は反射的に距離をとる。

「ユキはイルミと知り合いだったのかい？」

ヒソカはトランプを捌きながらいきなり俺に尋ねる

「なんだよ、知り合いだったら悪いのかよ」

「くつくつ…、しかも結構長い付き合いだって？」

に、逃げ切れない・・・しかも若干殺気が……

目を泳がせながら、ごまかしているといいタイミングでイルミが入ってきた。

素顔で入ってきたイルミの腰に抱きつく。

・・・ほぼ、タツクルだが。

「イルミ会いたかった………！」

俺が泣きそうな声を出すと、イルミは心配したように

ヒソカに殺気を向ける。

「ヒソカ、青い果実見つけたんだろ。そっちにちょっかいかけてなよ」

そう言ってイルミは針に手をかける

「青い果実は実るのを待っているんだよユキは既に熟しているし、色んな意味で美味しそうだしね」

ヒソカは舌なめずりをしてトランプを構える。

ワオ、お互い殺る気満々？

俺は二人から距離を取りつつ傍観を決め込む。

するとヒソカは肩を竦めてトランプをしまった。

「ここでキミと殺り合うのは後々面倒そうだからやめておくよユキは諦めないケドね」

そう言っただけヒソカは壁に寄り掛かって座った

それを見たイルミも殺気を消して針をしまう

「…ユキ、大丈夫とは思うけどヒソカ変態だから絶対気を許したらだめだよ」

そう言い残してイルミも壁ぎわに歩いていく

「…気なんか許すわけないじゃん、貞操が掛かってるのに」

俺はため息を一つついて二人とは反対側の壁ぎわに腰掛ける。

ゴン達はラスト1分まで来ないから、それまで寝よう。

昨日は十分寝れなかったし。

俺は瞳を閉じて、ヒソカ対策に念のため円を広場中に張る。

「ヒソカ、俺が寝てる内に近づいたら殺るからな」

一応そう釘を刺して俺は「破壊方式」（俺の愛刀）を握り締めた状態で眠りに落ちる。

向こう側から聞こえてきた「残念」とかいう言葉は 空耳というこ
とにしておいた。

四次試験。その一

「残り1分です」

アナウンスを聞いて俺は眼を開ける

「…さすがに丸3日も寝るとかえってキツイなあ」

コキツと首を鳴らして立ち上がる

それと同時に前方にあった出口が音をたてて開いた

「あ！ユキも通過してたんだね！」

扉から出てきたゴンが俺に気付いて駆け寄ってくる

「うん、俺のルートは楽なヤツだったから。ゴン達はボロボロだね」

時間一杯まで色んな罠に追い回されたんだよね？

服の汚れを軽く叩いてあげながら俺はみんなを見渡す

「コッチは仲間割れとかあってかなり面倒だったんだぜ」

「そーだぜ、まあユキがコッチに来てたらこんなに苦労はしなかっただろうケドよ」

レオリオはそう言って背後のトンパを睨み付けた

あゝ、そういえばいたなあこんなヒト

「ふうん、まあいいじゃん結果的にはみんな通過できたんだしさ」

こんなヤル気ないヒト相手にするだけ無駄だし。

レオリオは「そりゃそーだけど…」とブツブツ言ってるけどほつとこう。

塔の外に出るとなんかやらしい目付きの
パイナップルさん（リッポー……だよな）が立っていた

「諸君タワー脱出おめでとう。残る試験は四次試験と最終試験のみ」

あと二つか…長かったような短かったような…

「これからクジを引いてもらう。このクジで決定するのは狩る者と狩られる者」

タワー脱出順にクジを引くよう言われ、ヒソカの次に俺はカードを引く。

198番…ってハゲゾーが間違えてゲットするヤツだ。

よし、キルアが倒したところを漁夫の利といこう。

四次試験対策を立てながら俺はみんながクジを引いていくのを眺めた。

四次試験。その二

ゼビル島行きの中、他の受験生達は情報を遮断するために塞ぎ込んでいた

うん、まるでお通夜だね。

辛気臭いことこの上ない。

気分転換に俺は頭の後ろで腕を組みながら船内をうろつくことにした。

あんなトコいたらカビ生えちまう。

暫らく歩くとゴンとキルアの姿が眼に入る。

「お、ユキ。お前何番引いた？」

キルアが俺に気付いて尋ねる。

俺は引いたカードをキルアとゴンに見せた

「…198番ってオレと一番違いだよな…、ユキってターゲット誰か分かってんの？」

「一応全員の顔と番号は把握してるぜ？」

「マジ？じゃコイツ誰か分かる？」

そう言つてキルアは自分のカードを指差す。

「それウモリつてヒトのだよ。帽子被つた三兄弟の一人で俺のターゲットの兄」

キルアは「あゝ、あのつまらなそうな三人か」とぼやいた。

まあ実際瞬殺だったもんな。

「ゴンとは？」

知ってるけど一応聞いてみるとゴンは頭を掻きながらカードを見せてくれた。

「……………あちゃあ……………」

「やっぱりユキもそう思うだろ？クジ運ねーよなコイツ」

俺の呟きにキルアはやれやれと肩を竦める。

ゴンは苦笑いを浮かべてカードを握った。

「…まあ殺し合いしなきゃいけないワケじゃないからなんとか工夫してみなよ。」

正面から正々堂々じゃ勝ち目零だし」

俺は立ち上がって踵を反す。

「ま、お互い頑張って合格しよ」

それだけ言って俺は二人と別れた。

「2番の方スタート！」

俺は取り敢えず開始と同時に島の中心に駆けて、
島全体に細い糸を張り巡らす。蜘蛛病ジグザグという。

うちの一族はこの使い手が極端に多かったからな。

別に円でもいいんだけどそれを何日間も維持するのはハッキリ言っておーラが勿体ないので却下。

絶をして木の上に潜んで張り巡らせた糸に意識を移す。

…確か二日目までは大した動きはないはずだから急ぐ必要はないか。

俺は糸を一ヶ所にまとめてくくってから空を見上げる。

「ハンター試験って暇な時間が多過ぎだよなあ…」

まあ普通のヒトにはギリギリなように出来てるんだろうけどさ

うーん、タワーで丸3日寝たから今は全然眠くないしなあ…

「…念の修行するかな、このままじゃ暇に殺される」

俺は周辺に糸で結界を張ってから新しい発の作成と
念でコピーできる技の確認をして時間を潰すことにした。

…二日目、念の修行を一旦切り上げて糸を確認する

「ん、クラピカとレオリオが合流したか、キルアはターゲット接触
するまでもう少しあるかな？」

島中の受験生の動向と位置を把握してから俺は木から飛び降りる

「…キルアのトコに行く前に遊んでいこうかな」

クスリと笑って俺は一直線に駆け出す

三秒かからずに広場のような場所に出る

真ん中にある岩場には鼻が二倍に膨れ上がった状態で縛られたトンパがいた

「あ！アンタは…」

突然現れた俺に目を丸くしながらトンパは呟く

「おやトンパさん、なにか新しいお遊びですか？」

俺は清々しいまでの笑顔で尋ねる

「いやあ、それがとある二人組の受験生にはめられちゃってな、よかつたらコレ解いてくれないか？」

胡っ散臭い笑顔をしながらトンパが頼んできた

俺は首を傾けて問い掛ける

「あれ？ソミーってヒトと一緒にレオリオはめようとしたのはダレでしたっけ？」

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

冷や汗をダラダラ流しながら困惑気味にトンパは尋ねてくる

俺はニツコリと笑ってから一本の缶ジュースを取り出す。

「そっ……それは……まさか……まさかアンタっ!？」

「ヒイツ！？やめろ！くるなっ！くるなあああ！！」

94

「縛られてさぞかし大変でしょうけど、ジュースでも飲んで頑張つて下さい」

そう言つて俺は缶の中身をトンパの喉に一気に流し込む

「んごごお！ゲボゴボっ！ゴブツ！ゴボゴボツ！！」

「ああ美味しいですか？そんなに喜ばれるとは思いませんでしたよ」

一滴残らず流し込んでから空の缶を投げ捨てて回れ右をする

コロコロコロ...

「おや、雷でしょうか？近いですねえ。当たらないように気を付けてくださいねトンパさん？」

そう言つてバシッ！とトンパのお腹を一叩きしてから俺は歩きだす

「あ...あ...、あああああ...」

背後からは哀れみを誘つような断末魔と、何かが堰を切つて溢れ出す音が響き渡つた

バイバイ、トンパ。キミのことは忘れないよ

俺は合掌してからキルアのいる方向に向かって走りだした。

四次試験。その三

キルアがさっきまでいたところを眺めると三人組が悔しそうに蹲っていた。

わちゃあ…、ちょっと長く遊びすぎたか…。

俺は肩を落として俯く。

あゝ、しかたないなあ………適当に三人狩るかあ…

そう思つて方向転換しようとしたところで背後に気配を感じた。
同時に背負っていた「破壊方式」を手に取り相手の首筋に刃を充てる。

「わっ！？ストップストップ！！オレだよユキ！」

そこには両手を上げて固まっているキルアがいた。

「あ、ゴメンゴメン反射的につい」

そう言つてばくは「破壊方式」を背負い直す。

「つい、で殺されたらシャレになんねーよ」

キルアは惘然として呟く。

「キルアもうプレート取ったでしょ？」

「あれ？なんで知ってんの？」

「さっきあそこで悔しがってる三兄弟がいたからね」

そう言つとなるほどね、とキルアは納得した。

「あ、そういえばプレゼントがあつたんだ」

そう言つてキルアはポケットからプレートを一枚取り出して俺に放つた。

「ワオ！198番じゃん」

「それユキのターゲットだろ？ついでに取つといた」

感謝しろよ？とキルアは笑う

「うん！ありがとーキルア！」

俺はそう言っでキルアに抱きつく。

「わっ！？ユキ！何すんだよ！？」

キルアは顔を赤くしながら慌てだす。

「何って感謝を表現してるんだけど」

それを聞くとキルアはコメカミに手を当ててため息をつく

「…誰彼構わずにこういうコトはするなよ、いろいろ危ないから」

？イロイロ？

俺が首をかしげるとキルアは何でもねー、と手をヒラヒラ振った。

……ヘンなの

「まあお互いプレートも集まったことだし試験終了まで時間潰そー」

ぜ」

俺はその誘いに頷いて 残り四日間をキルアとおしゃべりして過した。

ボ ツ!!!

『ただ今をもちまして第4次試験は終了となります、
受験生のみなさんすみやかにスタート地点へお戻り下さい』

さて、サバイバルは終わり。

いよいよ最後の試験だね。

俺は島に張り巡らせていた糸を回収してからキルアと一緒にスター
ト地点へ戻った。

「キルア！ユキ！無事だったんだね！」

「当たり前だろ？お前こそヒソカのプレート取ってんじゃない」

駆け寄って来たゴンにキルアがそう言うのとゴンは複雑そうな顔をす
る。

確か貸しとか言って渡されたんだよね、そのプレート。

ゴンってとにかく真っ直ぐな性格だから不本意なんだろうなあ…

俺はゴンの頭に手を置いてポンポンと撫でる。

「どんな形であれ、それはゴンが手に入れた物なんだから胸を張れ
よ」

ゴンはその言葉に驚いて俺を見る。

「納得がいかなければなら納得できるまで精進すればいい。

力が足りないと思うなら努力すればいい。それはゴン次第だ」

俺はそう言ってから薄く笑う。

ゴンは少しポカンとしていたけどすぐに笑顔を取り戻した。

「うん！ありがとう、ユキ」

「どついたしまして」

うん、やっぱりゴンはこうじゃないとね。

元の調子に戻ったゴンを見て俺は改めてそう思った。

「ほのぼのしてるって悪いんだけど無視しないでくんねー？」

「…あ」

横を見るとキルアが腕を組んでジトツと俺らを見ていた。

レオリオとクラピカは苦笑いを浮かべている。

「ゴメンゴメン勘ねないでよキルア」

「別にスネてねーよ」

ふん、とそっぽを向くキルアをゴンが宥める

こーゆーところは子供なんだよなあ〜

俺は二人のやりとりを眺めながらまるで保護者になったような気分になった

少々休憩。その一

『え　これより会長が面談を行います、
番号を呼ばれた方は2階の第1応接室までおこし下さい。それでは
受験番号109番の方』

「面談…？」

「これが最終試験…？」

アナウンスにゴン達は首を捻る

「たぶん最終試験の参考にするんじゃない？俺は呼ばれたから行く
ね」

ヒラリと手を振ってから俺はみんなと別れた

「おお、よく来たの。まあすわりなさい」

「あいさ、師匠」

ネテロ会長に促されて俺は正面に座る。

「試験はどうじゃ？」

「んゝ…俺的には少し物足りないですね」

「ほっほっ、そうかそうか。では試験の参考までに少し質問するがよいかの？」

よいか？って言われてもねえ…

「拒否権ないんでしょう？いいですよ別に」

俺は正座を崩して向き直る

「ふむ、ではまず、なぜハンター試験を受けたのかな？」

「…仕事で依頼された、ランクが上がると便利だからが建前だね」

「ほっ、では本音では？」

その言葉に俺は卓袱台をバシッ！と叩いて身を乗り出す

「アンタとジンが内部試験官やれってしつこいからでしょーが！
毎回毎回ホームコードに世間話を交えながら受験の催促なんかして
！！

何あれ！ストーカーよりタチ悪いよ！！」

「ひよっひよっひよっ」

「ひよっひよっ、じゃねえ！！」

ええいこの狸ジジイ……、ヒトの留守電に延々何時間も下らない
与太話入れといて謝罪もなしかいっ

「アンタは絶対俺が殺しますからね、勝手に死なないでください」

頼杖をついてジト目で言うとジイサンは

「ほっほっ、努力しようかの」

と楽しそうだ。

…世の中には煮ても焼いても食えない奴がいるってホントだなあ…

俺は呆れて肩を竦めた。

「さて、話を戻そうかの。ではおぬしが一番注目しているのは？」

「うゝん…44、99、301、403、404、405だけど…、一番なら405ですかね」

「ふむ…では一番戦いたくないのは？」

「全員」

俺は間髪入れずにピシャリと言いつ

「ほう…、それはなぜじゃ？」

「まず99、301、403、404、405は知り合いだから却下。」

44は俺と唯一マトモにやり合えそうだけど変態で身の危険を感じるから却下。

残りは下手打つとあっさり終わっちゃうそうだから却下。以上」

俺はそう言ってから欠伸を一つする。

「ふうむ…、なるほどのお…。うむ御苦労じゃった、さがってよいぞよ」

「はいはい、質問の内容からして最終試験は一对一のトーナメントか何かですか？」

俺は立ち上がりながらネテロ会長の方を見ないで呟く

「…相変わらず鋭いのう。ユキ」

「ははは、どうも」

俺が応接室を出ようとすると、師匠から声がかかる。

「…では最後にユキはどう思ってるんじゃない？」

「……」

今の質問がどういう意味なのか理解し俺は思わず口を噤んだ。
けれど師匠は早く言えと目をカッと見開き続きを促す。

「よく…わからない、です…けど、その…」

仲良くなりたい、と俯いて途切れ途切れに言っていると師匠は小さく笑った気がした。

…俺みたいな汚れた奴が純粋な子達と仲良くしたいなんて
やっぱり間違ってるんだ。

「あー…やっぱり今のナシで。ていうか俺最近おかしいんすよね。
今まで人の心配なんてしたことなかったのにゴン達のこと
心配したりもう自分が気持ち悪くて…」

「（ふむ、ユキもやつと人間らしくなってきたってことかのオ。
このままいい方に進んでくれるとありがたいんじゃないが）」

「なあ聞いてる？」

「何じゃまだおったのか。もう下がってよいぞ」

「（こんのクソジジイ…）」

文句を言おうとしたが何したってこの人に勝てないことを
痛い程理解してる俺はほんの少し芽生えた苛立ちを押さえ込み退室
した。

最終試験。その一

「最終試験は一对一のトーナメント形式で行う」

ホテルの広間に全員が集まりネテロ会長の最終試験についての説明に耳を傾ける

あの後サトツさんから聞いたのだが、俺も最終試験に参加することになったそうだ。

そして、内部試験官がいた、ということは、なしだと。

「その組み合わせはこうじゃ」

そう言ってネテロ会長が幕を引くとトーナメント表が現れる

ええ〜と…俺の相手は…

.....。

俺は無言で金ダライを具現化してジイサンに向かって投げつける。

グワアアアーン！！

寸分違わぬコントロールで投げられたタライは狸ジジイの後頭部を直撃した。

「ユキ！？何やってるの！？」

「ってかお前あのタライ何処から持ってきたんだよ！？」

ゴンとキルアが驚いたように聞いてきた。

ちなみに他のメンバーは眼を丸くして固まっている。

ゴメン、ゴン達。今はそんな質問に答える気分じゃねえ。

俺は周りを見殺ししてネテロ会長に詰め寄る。

「ちょっと！なんでよりもよってヒソカなのさ!？」

俺はネテロ会長の近くでボソボソと問い詰める。

「しかたないじゃろう、必然的に誰かと闘わねばならんのじゃから。それに44番以外の受験生が全員お主との闘いを拒否したんでの」

「はあ!?!マジで!?!」

「大マジじゃ」

ゴン達なら分かるけど他のヤツまで戦闘拒否？

くそう、怒りに任してトード蹴っ飛ばしたりしたからかな

チラ、と後ろを見るとヒソカがニヤニヤしながら既にスタンバっている

くあゝ、強い人と殺り合うのは好きだけど、あいつ重度の変態だしなあ…

「ほれ、いつまでもグズグズしとらんどつとといかんか」

ジイサンに背中を押されて俺は渋々ヒソカと向き合った。

「それでは、第1試合！

ユキノ対ヒソカ！！」

俺は背負っていた「破壊方式」を手にとってヒソカを見据える。

「始め！！」

立会人の合図に会場中に緊張が走る

俺とヒソカはお互い見つめ合ったまま微動だにしない

「くくく…まさかこんなに早くユキと闘えるとは思わなかったよ」

心底楽しそうにヒソカはトランプを捌く

「…俺はまだ闘うなんて言ってないけど？」

「…？どういうコトだい？」

俺の呟きにヒソカが不思議そうに尋ねる。

「ヒソカが俺と闘うに値するかまだ分からないからね」

そう言っただけ俺は「破壊方式」を水平に構えて腰を落とす。

同時に滲み出る殺気に部屋の空気が数度冷え込んだ。

「これで死ぬようなら、俺と闘う資格は無いよ」

俺の言葉にヒソカはより一層笑みを深くしてトランプを両手に構える。

[illegible]

刹那、ユキは間合いを消し去ったかのようなスピードでヒソカの眼前に現れ、真一文字に刀を薙ぐ。

《一薙ぎ ワン・スラッシュ》

「破壊方式」を使用した場合での自身最速の一撃。

ヒソカには皮一枚でその一閃を躲し、両手のトランプをユキの急所に向かつて投げつける。

ユキも上体を捻つてそれを躲し、反動を利用して斜め上段から一気に刃を振り下ろす。

それはバックステップで距離をとるヒソカの肩を僅かに引き裂き、
勢いそのままに床を真つ二つに分断する

「へえ…俺の一薙ぎを避けた上に反撃までしてくるなんてね…」

思った以上かな、これなら必要以上の手加減は要らないね

ユキは愉しそうに僅かに口端を吊り上げる

「くつくつ…美味しそうとは思っていたけどこれほど極上の果実だ
ったとはねえ」

ヒソカもまた嬉しそうに笑って新たにトランプを取り出す

「合格”だよ、ヒソカ」

そう言つてユキは「破壊方式」を肩に担ぐ

愉しげに細められた双眸から覗く眼光は蒼色に染まっていた

「おやキミの瞳は確か紅だったと思うんだけど」

「ハッ…、これは俺が本気に成った証みたいなものだよ」

親指で自分の眼を指しながらユキは言う

「さあ続きといこうか。今度はお試し期間じゃあねえから、本気で来ねえとあっさり殺っちまうぜ？」

ニタリ、と今迄と打って変わって凶悪な笑みを浮かべ、ユキは肌を引き裂くような強烈な殺気を引き出した。

ヒソカはそれを心地良さそうに受けて、自らも禍禍しい殺気を発する

周りのギャラリーの殆んどはこの場に居るのも辛そうに脂汗を滲ませる

「踊ろうぜ、ヒソカ。円舞曲^{ワルツ}をな」

ユキは呟く

そして、誰かが鳴らした喉の音を合図に、二人の姿は掻き消えた。

最終試験。その二

ヒュッ！

シュンッ！

ガギンッ！

風を切る音、金属同士のぶつかるような音、大小様々な音が会場中に響き渡る

相手の攻撃を紙一重で

または余裕綽々で躲し

或いは武器で受け

更には体捌きで受け流す

流れるような攻防、無駄の一切省かれた
舞踏のような闘いに誰もが思わず息をのむ

ガキイーン…！

ヒソカの一撃にユキは仰け反って「破壊方式」を手放した

ヒソカはその一瞬を逃さずにユキにトランプを振り下ろす

「！？ユキ！！」

ゴンは思わず悲痛な声を上げた

刹那、勝利を確信していたヒソカの顔が驚愕に染まる

仰け反ったユキは、まるで悪戯の成功した子供のように、愉しげに笑っていた

「甘えんだよ」

ユキは右手の指を熊手のように構え、そのまま腕を鞭の如くしならせてソレを振り抜いた

《一喰い イーティング・ワン》

本の世界の殺し屋（人間シリーズ、戯言シリーズ）

ただ純粋な戦闘能力だけなら人類最強の

哀川潤さえも凌ぐ『人喰い』 匂宮出夢の一撃必殺の究極技

至近距離からの神経伝達速度を越えた一撃に対して、

ヒソカは丁度腕を振り上げた状態 つまり、全くの無防備だった

ユキの一振りにはヒソカの脇腹を直撃し、爆発のような轟音と共にヒソカを壁まで吹き飛ばす

「残念でした、武器を手放したのはアンタに完全な一撃を入れるフエイクってワケ」

蹲るヒソカを見据えてユキは言う

「くくく…、まんまと騙されたワケだ」

ヒソカは左脇を抑えてゆらりと立ち上がる

「無理しない方がいいんじゃない？」

かなり手加減したとはいえアバラ5本は確実に”喰った”はずだし」

ユキは右手をヒラヒラさせる

「本気で打てば胴体真っ二つにできんだけどさ、それやっちゃうと失格だし？」

冗談だけど。

おどけた風に言つとヒソカはやれやれといった感じに肩を竦めた

「確かにこのまま続けてもボクに勝ち目はなさそうだね参ったよ、ユキ」

「ほいさっさ」

ユキは軽く受け答えて、転がっている「破壊方式」を背負い直す

「し…勝者、ユキ！」

立会人の言葉にユキは右手を突き上げた

最終試験。その三

さて、コレでやっと終わりだね。

「すごいやユキ！ヒソカを倒すなんて！」

「てゆうーか最後の平手打ち音おかしかっただろ！お前ホントに人間かよ！？」

試合を終えてみんなの所に戻るとゴンとキルアが詰め寄ってきた

キルアにいたっては俺の右腕をつつきながら「信じらんねえ……」とか呟いている

肉体操作して心臓抜き取るキミにだけは言われなくなかったよ、うん

二人を適当にあしらっているとクラピカが神妙な面持ちで近づいて

くる

「ユキ…、君はクルタ族なのか？」

その言葉にゴン達のはっとして俺の顔を見る。

ちなみに眼は既に元の紅に戻っていて蒼くはない

うーん…やっぱりクラピカの目の前で眼の色変えたのは失敗だった
なあ…

生き残りが他にいるかも、みたいな淡い希望持たせちゃったかな？

「残念だけど俺は蒼迅一族、クルタ族じゃないよ」

俺が肩を竦めてそう言うところクラピカは僅かに表情を曇らせる

「クルタ族は普段茶色の瞳で興奮すると緋色になるんでしょう？俺は普段が紅で、

変わったときに蒼になるからね」

「……そうか…すまなかったな、ユキ」

「いや、気にしないでいいよ。アレを見れば誰でも勘違いすると思うし」

元の世界でもよく兄さんとクルタみたいってあそんでたし。

あの時はまさか本物と対面する時が来るとは
思ってたな…

「ねえクラピカ。クルタじゃなくても俺はクラピカの仲間だよ?」

俺は俯いてるクラピカの顔を覗き込んで薄く微笑む

「…! ああ、ありがとう」

クラピカは驚いた顔をしたが、すぐに立ち直って笑みを浮かべる

「オレ達のコト忘れてんじゃねーかい? お二人さん」

「そーだぜ、のけ者かよ」

レオリオとキルアが抗議の声を上げたのを見て俺とクラピカは顔を見合わせて笑った。

「ウオッホン！試験を続けてもよろしいかな？」

ネテロ会長が咳払いをして俺をジトツと見つめる

あ、試験のことすっかり忘れてたよ

周りを見渡すと他の受験生達は微妙な顔をしてコツチを見ている

ワオ、晒し者状態？

「あ、じゃあ俺合格したし外で休んでいい？ちょっと疲れちゃったし」

なんか居たたまれないので早口にネテロ会長に聞くと好きにせいと

言われた

「んじゃ！みんな大丈夫と思うけどがんばってね！」

俺はそう言ってみんなと別れて足早に出口に向かう

「あまりキルアをいじめるなよ？友人」

「！」

去り際に扉の近くにいたイルミの耳元に囁いて俺は会場をあとにした

ボタン…

「ふう…。まあしかたないよねえ」

本当は疲れてなんかないしあのまま会場に残ってみんなの応援したかったけど…

「すっかりハゲゾー殺しちゃうかもだしなあ」

仲良くなつた仲間がいたぶられているのを見て
正気を保てるほど俺は人間出来てないしねえ

「…それにイルミを止めちゃいそうだしなあ。
ゴンとキルアの絆を深めるにはあの一件は必要だろうし」

キルアにはキツイだろうけど、本当にゴンと友達に成りたいってこ
とを再認識してもらわないといつまでも闇から抜け出せないままだ
ろうからな

まあこの一件が終わったらかっさり頭に刺さってる念は除念してあ
げよ

「なんでも思い通りにいくと思ったら大間違いだよ？タラちゃん…
……」

「いるみんでもいいな」

俺は廊下を歩きながらそう呟いて一人笑った

最終試験。その四

五時間程して会場前まで戻って来ると頬に返り血を着けたキルアが出て来た

眼に光は無く本当に人形のような状態で俺の横を黙って通り過ぎて行く

「キルア」

俺は振り返らずに口を開く、キルアも立ち止まらずにそのまま足を進める

「俺にとってもゴンにとってもキルアは大事な友達だよ。俺なんかでいいならな。」

誰が何と言おうとその事実だけは変わらない」

「……………」

キルアは返答せずに廊下を曲がって姿を消した

「…思った以上に闇は深いみたいだね」

俺はそう呟いて会場の横にある控え室の扉を開けた

バン!!

「キルアにあやまれ」

あの後目覚めてからキルアの失格と内容を聞いた
ゴンは一直線に会場のイルミの所に向かってそう言った

ちなみに俺はついて行って今は入り口の壁に寄り掛かっている

「あやまる……？何を？」

イルミはゴンを見ないまま返答する

「お前に兄貴の資格ないよ」

「？兄弟に資格がいるのかな？」

その瞬間、ゴンはイルミの腕を掴んで席から引っ込抜いた

「友達になるのにだって資格なんていらない！！」

骨の軋む音を響かせてゴンはイルミを睨む

「もうあやまらなくなたっていいよ。案内してくれるだけでいい」

「そしてどうする？」

「キルアを連れ戻す」

その後、レオリオとクラピカの異議申し立てはネテロ会長に却下され、

ポックルとクラピカの争いはゴンの一言で打ち消された

「それより、もしも今まで望んでいないキルアに無理矢理人殺しさ
せていたのなら」

「お前を許さない」

ギシ、と一際大きく骨の軋む音が響く

……折れたな

「許さないか……でどうする？」

イルミは骨折にも顔色一つ変えずにゴンに尋ねる

「どうもしないさ。お前達からキルアを連れ戻して、もう会わせなようにするだけだ」

ゴン、それはどうもしてると思っただけど？

ツツコミたいけどシリアスをぶち壊してしまうので、俺は真面目な顔をしたまま心の中でツツコミを入れる

「……………」

イルミは無言でオーラを纏った左手をゴンにかざす

「！」

ゴンはイルミの手が触れる寸前で飛び退いた

流石野性児。五感の鋭さは一級品だね。

俺はゴンの背後に立って人差し指でイルミに念の文章を書く

『素人に念を当てるな、ゴンに手を出したらイルミでも容赦はしない』

イルミはそれを見て多少不機嫌そうに視線を反らした

「さて諸君よろしいかな？」

ネテロ会長のその言葉で講習会は再開した

「ギタラクル、キルアの行った場所を教えてください」

講習会が終わってからゴンはイルミに詰め寄る

「やめた方がいいと思うよ」

「誰がやめるもんか。キルアはオレの友達だ！！絶対に連れ戻す！！」

「…後ろの3人も同じかい」

イルミはゴンの背後に立っている俺達を見て問い掛ける

「当然よ」

「Yes My Load」

俺とレオリオがそう言つと、イルミは黙って踵を返す

「ギタラクル！」

ゴンが怒つたように叫ぶとイルミは俺をチラリと見る

「キルは自宅に戻っているはずだ。場所を知りたいならユキに聞けば？」

その言葉に3人はバツ！と俺の方を振り返ってきた

「ユキ場所知ってるの！？」

「てかなんでアイツお前のコト知つたように話してんだよ！？」

「ユキ、ヤツとはどういう関係なのだ？」

ズスイツと身を乗り出してくるゴン達から身体を反らせながら後退る

「あゝいやゝゝ、実はゾルディック家に

遊びにいった（拉致られた）ことがあるんだよねえ」

かはは、と笑って言う　みんなは一旦フリーズする

まあ予想通りの反応だねえ、

でも細かく説明するのも面倒臭いし要点をさっさと言いますか

「パドキア共和国デントラ地区にある標高3722メートルの山、
ククルーマウンテン。その頂上にゾルディック家は存在する」

最終試験。その五

その後、他の受験生と別れを告げて俺らはパソコンの前に座っている

「パドキアは飛行船で3日位だけどいつ出発する？」

「「「今日のうち！！」」」

「アイアイサー」

ゴン達の返答に俺はチケットを手配する

「ユキ、次はハンターのページでジンってどこめくってみてくれる？」

「え？ジンをめくるの？ジンの知り合い？」

俺は首だけで振り向いて尋ねる

「うん、ジンは俺の親父なんだ。
サトツさんがそうすればジンがどんな人物かわかるって」

「ああ…なるほどね」

俺はゴンの言葉に片眉を吊り上げてジンのページをめくる

ピーッ ピーッ

「?どういうことだ?こいつは」

「極秘指定人物ってワケだよ」

俺は椅子を回転させてゴン達に向き直る

「これに加入すると電腦ページ上でのあらゆる情報交換が禁止されるんだよ。ただし、個人が加入するには大統領クラスの権力と莫大な金が必要だけだね」

ニッ、と笑って説明すると三人は絶句していた

「…ゴン、お前の親父は予想以上にとんでもない人物みたいだな」

「うん」

レオリオの呟きにゴンは嬉しそうに返答する

「ユキは知ってたの？ジーンが極秘指定人物に加入してるって」

「ん〜、まあ師匠みたいなもんだし親友だしね。

それに俺も加入してるし、コレ」

そう言っただけは後ろ手で俺についてのページをめくる

「……ホントだ……」

「お前マジで何者だよ……」

「…開いた口が塞がらないとは正にこの事だな…」

三者三様の反応に笑みを深めて俺はパソコンの電源を落とした

「俺はユキノだよ、それ以上でも以下でもない」

俺がそう言っただけで立ち上がると、

三人は苦笑いしながら、それもそつだと頷いた

御宅訪問。その一

ゾルディック家訪問も3年ぶりなんだよなあ…

あー…、キキヨウさんとかになんか言われそうだな…

飛行船で飛ぶこと3日、

電車で揺られること2時間定期バスに乗ること30分

只今、ゾル家の試しの門の前に来ております

いや〜ここまで長かった…

いままではどこでも アでひとつ飛びだつたから

まさか普通だとこんなにかかるとは思わなかったよ…

ホーント便利な能力してるよなあ、俺って

ぼーっと扉を眺めながら考えてると

賞金稼ぎつぱい二人組が守衛さんから鍵を奪い取って中に入っていく

馬鹿だなあ…扉の向こうの気配にも気付かないのか…

冷めた目付きで扉を見つめていると数分と待たずに2体の骸骨と巨大な腕が扉から出てきた

前から疑問だったんだけど、

どーゆー食べ方したら原型保って服着たままの骸骨になるんだろ？

ミケってすごいのか……………？

「え、皆様御覧いただけましたでしょうか。一歩中に入ればあの通り無惨な姿をさらすことに…」

バスガイドさんは少しも取り乱さずに解説を始める

日常茶飯事なんだろうーなあこーゆー事態

俺は慌てふためく観光客を尻目にゼブロさんに近寄って耳元で囁く

「お久しぶりです、ゼブロさん」

「おや、ユキノ君じゃないですか」

「その3人はそのことを知らないので3年前から
ゾルディック家と知り合いだって言わないで下さいネ？」

人差し指を口に寄せて言うゼブロさんは3人を見回して頷いた

「なるほどねーキルア坊っちゃんの友達ですかい」

俺らはバスツアーを抜けて守衛室でお茶を啜る

あ、この緑茶玉露だ

「うれしいねエわざわざ訪ねてくれるなんて。
20年勤めてるけど友人としてここに来てくれたのはユキノ君以来
初めてだよ」

まあ暗殺一家に友達として遊びにくるなんて普通じゃないよねえ

そもそもあの人達が進んで友達作るとはとても思えないし

俺は窓から山頂を眺めて一気にお茶を煽る

「しかし、君らを庭内に入れるわけにはいかんです」

ゼブロさんの言葉から正門には鍵が掛かっているという話に繋が
り、

レオリオが門を押し始めた

んゝ…まだみんなじゃ力不足か…

「押しても引いても左右にもあかねーじゃねーかよ！」

「上にあげるんだったりして」

「単純に力が足りないんですよ」

「アホか　！！全力でやってるってんだよ！」

ゼブロさんの言葉にレオリオが吠える

レオリオ、その程度はこの家のヒトにとって全力とは言わないんだよ

ここの御当主ソレを片手で？まで開けちゃうから

文句を言うレオリオを諫めてゼブロさんは？の扉を開けてみせる

「年々これがしんどくなってきたねエ。でも開けられなくなったらクビだから必死ですよ」

ゼブロさんは服を直しながら笑って言う

まあ普通ならこの歳で片方2トンの扉開けるほうが異常なんだけど

ゼブロさん念修得してないのにねえ

「ちなみにキルア坊っちゃんに戻ってきたときは？の扉まで開きましたよ」

「？…ってことは、12トン！！」

「……16トンだよゴン」

俺とクラピカのツツコミがハモる

俺もこのシーン見たとき計算してみたんだけど、18にしかなんな
かった。

何で全く関係ない数字になるのさ。

御宅訪問。その二

「おわかりかね？敷地内に入るだけでこの調子なんだ。
住む世界が全く違うんですよ」

ゼロさんの発言にゴンは試されるのは嫌とこね始めた

うーん、それは俺も同感だけど…

あの人外な方々と付き合うにはその位できないと
命いくつあっても足りないのだよ、ゴン

ゴンの意見にゼロさんは仕方なさそうに
電話をかけるが打ち切られ、それを見たゴンが執事室にかけなおす

「いいからキルアを出せ!!」

…くあゝ、知ってたけど ビックリしたあ…

ゴトーさん鼓膜破れなかったのかなあ…？

ばーぜんと驚いているとどうやらゴンは電話を切られた様子

ん…、ちょっとスムーズに話進める根回しするかな

俺はゴンから受話器を取って執事室の番号を押す

ブルルル… ガチャ…

『はい、ゾルディック家
執事室』

「相変わらずですね、ゴトーさん」

『！？…その声は…』

俺の応答に受話器の向こうから困惑した空気を感じる

「久しぶりですね、ユキノですよ。」

まあ声だけじゃ信じられないでしょうから
これから俺そっちに行きますからシルバさん達に
そう言っというて下さいそれじゃまた後で」

一息でそう言い切って返答を待たずに叩き切った

「じゃ、そういうことだから俺は先に行ってるから。
あとゴン？こんな扉も開けられないようじゃキルアと対等になるな
んて無理だよ、
試す試さない以前の問題」

俺は突き放すように言って試しの門に手を掛ける

ギョオオオン…

…ふむ、紅眼じゃなかったら？までが限界か

「ユキ！！」

後ろからゴンの怒ったような困惑したような
叫びが聞こえたので振り向かずそのまま返答する

「このメンバーはみんなこれを軽々開ける。
友達を語るならせめて同じ土俵に上がりなよ。俺とジンみたいにさ」

それだけ言って手を離すと轟音を響かせて扉は閉じた

「…ちよつと言いすぎたかな？」

ゾル家に向かって走りながら俺は呟く

でもこれからのことを考えると？の扉位開けてもらわないと困るしなあ

それにゴンとキルアには、

お互い切磋琢磨しあうことで成長していつて欲しいから、

まずはゴンがキルアに実力的にできるだけ近づかなきゃいけないし

「ま…なんとかなるよね、ゴンはあの程度でへこむようなタマじやないから」

むしろ問題はキルア、ってゆーかゾルディック家の方にあるけど、それは俺がなんとかしよう

俺は足を止めて屋敷の入り口直前で止まる

「お久しぶりです。いるのは分かってますよ？シルバさん、ゼノさん？」

その言葉に二つの人影が柱の影から現れる

「本当に久し振りじゃのお。一体今まで何をしておったのじゃ？」

その質問には答えず、俺は話を進める。

「今日は友人としてキルアに会いに来ました。更に言えば連れ出しに、ですけどね」

俺がそう言つと二人の纏うオーラが変わつた

「友人か、あいつにそんなものは必要ないと思うが？」

「必要です。キルアは精神的に脆い。
支えとなり共に成長していく存在が不可欠。このままいけばあの子の精神は破綻します」

俺は笑みを消して二人を見据える

「ほう？まるでわしらがキルのことを理解できてないような口振りじゃのう？」

ゼノさんが笑いながら尋ねてくる、ちなみに眼は全く笑っていない

「みたいじゃありません。理解していないと言ってるんですよ」

その瞬間辺り一面に三つの巨大な殺気が立ち籠めた

「…どうやら問答は仕舞いのようじゃの。ユキ、お主何を企んでおる」

ゼノさんの問い掛けに俺は笑みを深める

「なに、ちょっとした賭けをしようと思っただけでね」

「賭けだと？」

「ええ、俺がアナタ達に勝ったらキルアが友達を作って自由にすることを認める」

「ほう？ではお前が負けた場合はどうする？」

シルバさんは片眉を上げて愉快そうに聞いてくる

「なんでもいいですよ？殺すもよし、タダ働きさせるもよし、好き

にして下さい」

ぼくは眼を蒼く染めながらそう言ってオーラを練る

「ほう、ではお主が負けたらゾルディックに養子に来る。と言っの
はどうじゃ？」

「……上等」

ゼノさんの提案に俺は短く答える

どんな条件だろうと関係ない、キルアのためにも敗北の2文字はあ
り得ない

俺は「破壊方式」を肩に担いで戦闘態勢に入った二人を見据える

「それでは、始めましょう」

それと同時に二人の姿が消え、前後に殺気を感じ取る

シルバさんの上段蹴りを躲しつつ「破壊方式」を横に薙いでゼノさ

んから距離をとる

コンビネーションを取らせると面倒だな…

俺は《模版解答 チートコピー》でカストロのダブルを使用し二手に分かれる

分身は念を使えないけど体術は俺と同等、時間稼ぎにはなる

分身をシルバさんに向かわせて俺はゼノさんに挑み掛かる

「フン！戦力を分断させる腹か！」

ゼノさんは手にオーラを集中させて龍の頭を作り出す

《牙突 ドラゴンランス》！！

「チイツ！？」

避け切れず頬を掠めたことによって右頬に赤い線が奔る

ああつぶネエ！

「《一薙ッ ワン・スラツシュ》！」

カウンターで懐に入り込み持ち得る最速の一閃を叩きこむ。

しかし頬を掠めて怯んだ分ロスが生じ、肩を多少決る程度に終わった

チツ、今ので決めるつもりだったのに！

刹那、殺気を感じて上に飛び退くと念弾が脚を掠める

振り向けばシルバさんが分身を碎いてゼノさんに加勢に来ていた

俺は小さく舌打ちして曲絃系で二人を攻撃する

ゼノさんは紙一重で躲したが、

シルバさんは念弾を撃った直後のスキが災いして全身に糸が巻き付く

っし！捕らえたっ！

これで事実上一対一っ！

俺は反転して着地し、シルバさんの方を向く

「甘いわ！！」

ブチブチブチッ！

「んなあああああ！？」

曲絃系素手で引きちぎったよこの人！？

どーゆー身体構造してんだよ！？ハルクかあんたは！

「うりゃ！！」

「！！」

驚愕に固まっていると背後からゼノさんに突かれて脇を挟られる

げ、しかも意外と深い…

俺は瞬歩で一気に二人から均等に距離を取る

「あゝ…二人をちまちま相手にしたらキリないな。氣イ乗らないケド大技使うか」

追ってくる二人から逃げながら俺は胸元で手をかざして詠唱を始める

『黄昏よりも暗き者… 血の流れよりも赤き者…』

時空の流れに埋もれし、偉大なる汝の名において…』

俺の異変に気付いた二人は勝負を決めるべく一気に間合いを詰めてくる

でも、もう遅い！

『我、此处に汝に誓う。我らが前に立ち塞がりし、全ての愚かなる者どもに、我と汝の力をもて、等しく滅びを与えんことを！』

一気に言い切って振り向きざまに二人に向かって両手を突き出す

『竜破斬 ドラグスレイブ！』

その瞬間、眼も開けられない程の強力な閃光が辺り一面を白く染め上げた

御宅訪問。その三

ズズウウン……

「うおっ、何だ？地震でも起きたのか？」

「違うよレオリオ。山頂付近で大きな爆発があったみたい」

「爆発ウ？ここって死火山じゃなかったのかよ」

「……もしかするとユキの身に何か起きたのかもしれないな……」

「何かって？」

「それは分からない。しかし余り悠長に鍛えている場合ではないな」

「そーだな、いつまでもキルアとユキを待たすわけにもいかねーぜ」

「うん！急いで鍛えて早く二人に会いにいこう！ー！」

「ああ」「おうよー！」

ココンココン……

「……やっぱ、やりすぎた」

俺の目の前には直径百メートルほどの巨大なクレーター

……やっぱり試したこともない大技をぶっつけ本番はマズかったかな
あ……

一応出力抑えて撃つたのにこの有様は問題だよな……

「シルバさーん、ゼノさーん、生きてますかー？」

焼け野原となった一帯に向かって呼び掛けてみると
地中から二人がズタボロになって這い出てきた

うん、なんかゾンビみたい

「やれやれ…死ぬかと思ったわい」

首を鳴らしながらゼノさんが言う

「てゆうか《竜破斬》ドラグスレイヴ》直撃して生きてるなんて絶対アナタ達おかしいです」

「こんな大技繰り出して平然としとるおぬしに言われたくないのお」

俺の言葉にゼノさんが半目になって睨んできた

ぐっ…、痛いところを…

でも曲絃系素手で引きちぎったり《竜破斬》食らって立ってる67歳よりはマシだい！

俺はゼノさん達から視線を反らしてクレーターの方に向き直る

……流石にヒトんちの庭に大穴開けっぱなしにするワケにもいかないもんなあ……

「《双天帰盾》私は拒絶する」

俺が言霊を紡ぐとクレーターの周りに結界が現れ、破壊された一帯が元通りに再生していく

「…おぬしはまるでシヴァのようじゃのう」

ゼノさんはその光景を見ながらポツリと呟いた

「破壊と創造、踊りを司る神様ですか？俺はそんな大それた存在じゃないませんよ」

俺は肩を竦めて苦笑する

「舜桜、あやめ。ついでにこの二人も治してあげて」

俺は結界を張っている二人の妖精にゼノさん達を指差して頼む

ゼノさんがわしらはオマケか、とか愚痴っていたけど無視しといた

「じゃ、ユキ。また用があつたら喚んでね」

「おーう、二人ともサンクス」

ゼノさん達の治療を終えて俺は舜桜とあやめを消す

「あれは意志があるのかの？」

ゼノさんが尋ねてくる

「ええ、意志もあるし思考もする自律的な存在ですから」

てゆうーか俺が召喚するヤツは大抵自分の意志持ってるヤツばっかだし？

中にはわがままなものいて大変なんだよね…

遠い目をして召喚関連の修行を思い返しているとシルバさんが口を開く

「ユキ、キルを連れ出してどうするんだ？」

振り返って見ると父親の顔をしたシルバさんがいた

「別に俺はどうこうするつもりはありませんよ？
ただキルアは此処にいるより外の世界に触れる方が成長すると思うから連れ出すんです」

笑って言うとしルバさんは屋敷を指差す

「キルは今地下の独房に居る。お前の円ならすぐに見つけられるだろう」

「会っていいんですか？」

「おぬしは賭けに勝ったんじゃ、当然じゃろって」

俺の質問にゼノさんが肩を竦めて答える

意外だなあ……ごねると思ってたんだけど

「何よりおぬしを怒らせるとククルーマウンテンごと消し飛ばされそうじゃからの」

「アナタはヒトのことなんだと思ってるんですか？」

いや確かにそれクラスの破壊力の能力はありますよ？

だからってちょっとごねただけでんな暴拳に出るわけないでしょーが

俺はゴジラか

「……じゃ、会いに行ってきます」

俺が頬を引き吊らせながら歩みだすとシルバさんが俺を呼び止めた

「ユキ、キルを連れ出す前にオレの部屋にアイツを寄らせてくれ」

「りょーかいしましたー」

ふらふらと右手を振って俺はそれに返答した

御宅訪問。その四

「……………」

さっきから、どうも気配を感じる。

ここはゾル家のくそ長い廊下。

俺は何度も振り返るが、誰もいない。

やめろよこついつの。

俺が苦手なの知ってるでしょ?!

「……………!?!?」

突如、空気を切るような鋭い大きな音。

しかし、それより先に、攻撃が来た。

どこから来たかわからない何かを一瞬の殺気で気づいた俺は

紙一重で体を大きく右にそらし、攻撃を受け流す。

どういうことだ

「音より早く、攻撃した……………」

音より早い、ということは、攻撃が音速を超えた。

俺は急いで、頭の中で、理論を作る

これは拳銃の音と同じだ。

銃から大きな破裂音がするのは、弾丸が音を超えるから。

正直言ってまずい。

見える相手ならどんと来い、という感じだが、
見えない相手にどうしろというのだ。

次に攻撃が来たら、避けられるかわからない。

………さてよ、ゾル家を暗殺に来たような奴等は俺を攻撃しないん
じゃ………？

賞金首狩りはあまり体力消費したくないはずだ。

それなら俺を攻撃する訳がない。

ということは、これはゾル家の誰かか。

俺の知る限り、というか原作にこんな奇想天外な能力を持ったやつ

はいなかったはずだ。

原作にいないとなると、ゾル家の執事か使用人となるな。

どうやって姿を現わさせようか……

ピコンっ

俺の頭の上に、漫画ならきつと、電球が出たことだろう

いいこと思いついちゃったよ、僕様ちゃん。

見えない相手に向かって、俺は叫ぶ

「おいっ誰だか知らないけど、姿を見せないなんて、卑怯者だな！
」

姿は現れない。

「こんな卑怯者は、このクソ暗殺一家にお似合いだよ!!」

俺でさえ、押しつぶされそうな殺気が、背中から突き刺さる。

また攻撃がくる。

だが俺はその攻撃がずっと前からわかっていたような
かなり余裕にずっと左に動き、受け流す。

ニヤリ、と俺の口が弧を描く。

すべて、分かったぜ。

さっきの言葉で、攻撃が少し単調になった。

ということで、二つわかる。

まず一つ目、相手は使用人ではなく、執事だということ。

主人貶されて怒ったんだろうな。

そして二つ目、相手は強化系だということ。
単純一途だったというか、主人に忠実というか。

最後にひとつ。

俺はクルッと振り返り、後ろに向かって走り出す。

「おまえはここだあああああああ……！」

目の前にあった壁をぶち破る

「……………ちっ！」

銀髪的美青年が壁から飛び出し、攻撃を仕掛けてくる。

しかし、姿が見えてる敵は、もはや相手ではない。

俺は再び笑うと、銀髪執事クンに向かって走り出した。

二つの閃光は、止まることなく、幾度もぶつかり、火花を散らす

御宅訪問。その四

「へえ、ユカリって名前なんだ？」

「ああ、二年前からイルミ様にお仕えさせてもらっている」

あの後和解した俺らはお互いのことを話し、

ずいぶん前からの旧友のように仲良くなった。

肩まで伸びた銀色の髪。

左右で違う目の色。

そしてユカリの纏う、独特の雰囲気。

全てを許してしまいそうな、優しげなモノだった。

ユカリは、見た目に反して交友的な人だ。

この短時間で理解してしまった。

とても、暖かった。

「この先の通路を右に曲がったところの階段を下り、その廊下の手前から5番目のドアの中にミルキ様と一緒におられる」

「おう、サンクス〜〜じゃ、またね」

こんな長い道案内覚えられるのかなんて疑問を抱いた方。

俺を舐めてもらっちゃあ、困ります。

瞬間記憶力はいいんです。

ユカリ……………か。

そんなことを頭で考えながら、俺は暗い階段を下りて行った。

御宅訪問。その五

「くくく、どうするキル？」

…ツカツカツカ

「オレがママに頼んで執事に命じてもらえば3人とも……」

ドバン！

「キルア！おにーさんが助けにきたよん！」

「……………」

「……………」

「……《兄弟の戯れ、ただし禁断の愛》みたいなの！」

「「誤解を招く発言すんな！！」」

ワオ、息ピッタリ

「ってユキ！？お前なんで此処にいんだよ！？」

「囚われのお姫様を助けるために魔王を退治してきた勇者にその言い草はないんでないかい？」

「誰が囚われの姫だっ！」

「え？キルア」

「さも当然に言っくんじゃねえ！！」

あっはっは、キルア真っ赤。かーわーいーいー

「お、お前何者だ、どうやって此処まで来た！」

その声にちらつと横を見るとやたら挙動不審なミルキくん

ああ…すっかり怡幅良くなっちゃって…

おにーさん悲しいよ

俺は心の中でそっと涙を流しつつミルキの質問に答える

「どうやってって…さっき言ったじゃん。魔王を倒したって」

「?……………!?まさか……………あり得ない!!」

意味を理解したらしく、ミルキは目に見えて狼狽え始めた

キルアにいたっては目を見開いて呆然としている

まあ、あの二人を俺みたいなのが倒したなんて
普通は信じれないだろうねえ…

「本当じゃミル、そのへんで終わりにしろ」

「ゼノじいちゃん!？」

突然のゼノさん登場にミルキは飛び上がる

「本当ってどういうコトだよ!？」

「そのまんまの意味じゃ、

コイツは2対1にもかかわらずわしとシルバを打ち負かしおった」

「なっ…!？」

おお、青くなってる

まあこの家の子供からしたら二人に勝てる人間なんていないと思ってるだろーからねー

それを一人で倒したとなれば怖いよね〜（他人事）

「キル、シルバが呼んだからもう行っていいぞ」

「あ…うん…」

そう言ってキルアは拘束具を引きちぎって歩いてくる

「よし、シルバさんのところいこーか。
ちゃっちゃんと話してちゃっちゃんと出よう」

そう言つてキルアの手をとつて俺は独房をあとにした

「なあユキ…親父達倒したつてマジ？」

着替えてシルバさんのところに行く途中でキルアが聞いてくる

「うん、危なかったケドね。賭けしてたから負けらんなかったし」

「賭け？」

「そ、俺が勝つたらキルアは自由。負けたらゾル家の養子になるつて賭け」

「…………え…」

キルアは驚いた顔をしてコツチを見てきたので
笑つて頭を撫でてあげる

「約束は守るって言ってたからキルアはもう自由だよ」

キルアは暫らく呆然としていたけど弾けたように俺に抱きついてきた

「…ありがとう」

「どういたしまして?」

俺はしがみ付いたまま顔を上げずに呟くキルアの背中に腕を回しながら、おどけた口調で返答する

他人の敷いたレールを走るより

自分の敷いたレールを走るほうが何倍も難しい

自由になったこれからはそれ相応の困難が付きまとう

俺はあえて困難な方にキルアを放り出したんだから本当はお礼を言われる立場じゃない

「さーさっさとシルバさんに会お、あまりゴン達待たせてもなんだ

し」

「うん…、そーだな」

でもゴンと一緒にならその困難な道も
きつと乗り越えられるはずだから

自分を信じて、自分の目的のためにただ進んでほしい

「よし、親父の部屋まで競争しようぜ！」

「あれ？俺に勝てると思うてるの？」

「ハン、吠え面かせてやるぜ。よいい…」

「」「ドン…！」

そう考えるのは俺の我儘ですか？

御宅訪問。その六

「ユキ！何てことをしているの！？」

「何ってキルアにしたいことさせただけですけど？」

「余計なことしないでちょうだい！今はキルにとって一番大事な時期なのよ！」

「わかってんなら自由にさせときなさいよ。過保護は成長を妨げる最大の毒です」

キルアがシルバさんと話を終えた後、
ゴン達の待つ執事室（原作では20日かかったはずなのに3日で来た）に向かう途中で
キキヨウさんとカルトが現れた

話がややこしくなるのでキルアを先に行かせて
俺はさつきからキキヨウさんと口論（一方的にキキヨウさんが喚くだけ）をしている

「ウチにはウチの教育方針があるのよ！口出ししないでちょうだい！」

「んなこと言ってもキルアの人生はキルアのもです。ヒトがどうこう言うもんじゃないでしょう」

「私はキルの母親なのよ！」

ピキッ…

「それがどうした！！」

俺の怒鳴り声にキキョウさんは固まる

「親だつたら何やつてもいいのか！？束縛して！意志を抑えて！巫山戯んなよ！？アイツがどれだけ孤独だつたか少しでも考えた事があるのか！？立派な跡継ぎになるため？アイツがそんなこと望んか

？テメエの考えを他人に押し付けんじゃねえよ！！」

一息で言い切って壁を念抜きで打つ叩く

ゴキイツ！

鈍い音と共に壁は粉碎され俺の左手は血に塗れた

「才能が有るからってキルアに何でも背負わすんじゃねーよ。
家柄なんか一人の人生潰す理由になるかよ」

呆然とするキキョウさんとカルトの横を通り過ぎて外へ向かって歩を進める

「キルアがこれから外で色々経験した結果、家業を継ぐことを決めたなら俺は何も言わない」

俺は二人に背を向けたまま呟く

「『無理に強いられた学習というものは、何ひとつ魂のなかに残りはしない』」

「…結局はキルアの心次第ってコトだよ」

それだけ言っただけ俺は瞬歩でその場を離れた

「……………うわぁ……………やっちゃったよ……………」

俺は右手でコメカミを押さえながら唸る

「別に間違ったコト言っただけもりの無いけどさぁ……………あんな感情的になるなんてなぁ……………」

……………ジンの影響かな……………」

それともキルアの意志を持てない姿が前の自分とダブったから……………」

そこまで考えて俺は頭を掻き毟る

「あゝ、ヤメヤメ。生き方変えるってしのぶさんに誓っというてこのザマじゃ殴り飛ばされちゃうよ」

もう前とは違う、意志を持って自分に正直に生きればいい

「…うん、自己完結完了」

そう呟いてから壁を叩いた左手に視線を移す

「うつわグシャグシャだ…
やっぱり翔兄いと違って念で強化しないと破壊力に肉体が追い付かないか…」

翔兄いは素手でコンクリ粉砕しても傷ひとつなかったなあ…、
やっぱ化物だよなあ…あの人

左手にケアルをかけて完治させてから俺は執事室の扉を開ける

「や、無事再会できたようだね諸君」

「『『『ユキ!』』』」

おお、ボロボロだなあゴン

「先に行つたのになかなか来ないから心配したよ!」

「何もされなかったか?」

「あまり心配かけんなよ!」

「おふくろになんも言われなかった?」

四人は一斉に俺に詰め寄つて思い思いの言葉を紡ぐ

あゝ…怪我治療しといて正解だったなあ

「ん、別になんともないよ?此処のヒト達とは知り合いだし。
でもみんな予想したより早く来たねえ」

予定より17日も早いしなあ…なんでだろ?

「門を開けるために守衛さんの家で鍛えることになったんだが…」

クラピカが呟く

「山頂の方で凄い爆発音が聞こえたからユキに何かあったんじゃないかって話になって死ぬ気で鍛えたんだぜ？」

クラピカの続きをレオリオが引き継いだ

「爆発って……大丈夫かよお前、親父達と闘った時だろそれ」

キルアが心配そうな眼で俺を見つめる

いや、俺のせいですそれ

俺は思わず頬を引き吊らせる

…そうか、予定より早くみんなが来た理由はアレか…

まあ下手すりゃ山一つ消し飛ばす魔法だもんなあ…
そりゃ心配もするか…

「あゝ…俺は怪我一つしてないから大丈夫だよ」

むしろさせた方だし。

「そっか…、じゃ早速だけど出発しよーぜ」

キルアは訝しげな眼をしていたけど追及はせずにそう提案した

答える気ないってわかったのかな？

みんなで出口に向かう最中にゴンが後ろを振り返る

「ゴトーさん、キルアがいなくなったらさびしくなるね」

「いいえ…私共執事は雇用主に対し特別な感情は持ち合わせており
ませんので」

「うそつき!」

まっただよ!

ゴンの言葉に俺は心の中で同調する

キルアのこと気に掛けてるのなんて気配でバレバレだったのに

ゴトーさんは笑ってゴンにトリックを使ったコインゲームをしてみた

「世の中正しいことばかりではありません、お氣をつけて」

…重みのある言葉だなあ…ゴンがどう取るかはわかんないけど

「キルア様をよろしく願いいたします」

頭を下げるゴトーさんを見てぼくはゴンの手を引きながら口を開く

「ゴトーさん、キルアは必ず守るよ。あと、ユカリによろしく言う
として」

その言葉にゴトーさんの表情は微かに驚きに染まった後
和らいだのを確認して、俺は屋敷をあとにした。

「それにしてもお前本当にガンコだな」

街に出てからキルアはゴンに向かってそう切り出した

「ハンター試験合格したんだろ！？
ならハンター証を使えば観光ビザなんてなくてもずっと外国滞在で
きるんだぜ！！」

うーん…こう改めて言われてみると便利だよなあ証って…ほぼやり
たい放題って感じ？

「うーだって決めたんだもん。やること全部やってから使って」

そう言っただけでゴンは証を使うまでの予定を告げる

お世話になったヒトへの挨拶って…律儀だよなあゴン

その後、ヒソカの居場所についての話になって
クラピカがヒソカとの試験中のやり取りを語った

…そっぴや旅団のみんなは元気かねえ……

あつてみたいなあ……

取り敢えず話はそこで終わり、
クラピカ、レオリオとはここで別れることになった

「また会おうぜ」

「そうだな、次は」

「『『『『『9月1日、ヨークシンシティで!!』』』』」

御宅訪問。その六（後書き）

ゾル家編、長かったあ……………

途中で出てくるしのぶと、翔（翔太）は
トリップ前の組織の組員（しのぶは隊長で作者）です。
あと五人くらい出る予定。

天空闘技。 その一

「あつという間に三人になっちゃったね」

「さてどうする？」

「どーするって特訓に決まってるだろ」

「え？何の？遊ばないの？」

その言葉にキルアはゴンに笑顔で詰め寄る

「お前なー、今のまんまでほんとにヒソカを一発でも殴れると思ってるのか！？」

半年どころか十年たってもムリだったの」

ぶにぶにとゴンの頬をつつつきながらキルアは言う

あ、俺もつついてみたいかも。柔らかそうだし

そんなことを考えているとキルアが地面に絵を描いて説明を始める

…ブッ！ヤバい…！上手くてある意味笑える…っ！

くくく…、と笑いを噛み殺しているとキルアはずず　　と線を引き
いていく

「ここ！かなりおまけでな」

とんとんと地面を叩くキルアを不満そうにゴンは見つめている

ん…でも念を覚えてないゴンにとってはあの差は妥当なトコだよ
なあ…

「じゃキルアはどこなのさ!？」

「オレか？」

ん、と考えながらキルアは線を引いてみせる

「まあ……ここだろな」

そう言つてハンゾー達より離れた位置に自分を置くキルア

うゝん…確かに現時点ではハンゾーの方が強いけど…

キルアちよつと自分を過小評価し過ぎだなあ…

俺は”隠”で隠した状態のルーンセイブを具現化してキルアの頭を
気付かれない速さで薙ぎ払う

「!？」

「?どうしたのキルア？」

「…いや…、なんか今頭を通り抜けた感じがして……よくわかんね
ーけどスッゲー解放感がする……」

頭を掻きながら首をかしげるキルアを見て俺はルーンセイブを消す

これで一応除念完了、と
あとはキルア次第だねえ

「ふゝん…でもキルアってやっぱりすごいなー」

「真顔で言うな、恥ずいだろ」

ゴンのコメントに頬を染めるキルア

…青春だねえ少年（ジジ臭い）

せめてババアにして。

「じゃユキはどの位強いの？」

「計測不能」

ゴンの問いにキルアは間髪入れずに即答する

「…なんで俺は計測不能なのさ？」

「ヒソカ圧倒してウチの親父とじーちゃん二人を撃退するよーなやつ計れるかよ人外め」

「ヒド！俺のガラスのハートに大打撃だよソレ！」

「防弾ガラスの間違いじゃない？ウチのおふくろと対峙した後も清々としてたクセに」

「ぐはっ！」

きるあ のこっげき

かいしんのいちげき！

おれ に100のダメージ

おれ はちからつきた

「ああ！セーブしてないのにつ！？」

「おい、戻ってこーい」

はっ！いけないいけない…危うくドラクエに行っちゃうつコだったよ

俺はブンブン頭を振って頭を切り替える

「まあなんにしてもヒソカは相当強い！」

「うん！」

「並大抵のことじゃ半年で一矢報いるのはムリだ、ゴン、ユキ。金はあるか？」

「…うーん、実はそろそろやばい」

「俺は大丈夫だけど」

「つまりオレとゴンは手持ちがない、でもユキにそんなに頼るワケにはいかない、そこで一石二鳥の場所

がある」

「修行と小遣い稼ぎとくればあそこだね」

俺とキルアの言葉にゴンは不思議そうに首を捻る

「「天空闘技場」」

俺とキルアは声を揃えてそう言った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6478y/>

狩人物語

2011年11月27日15時04分発行